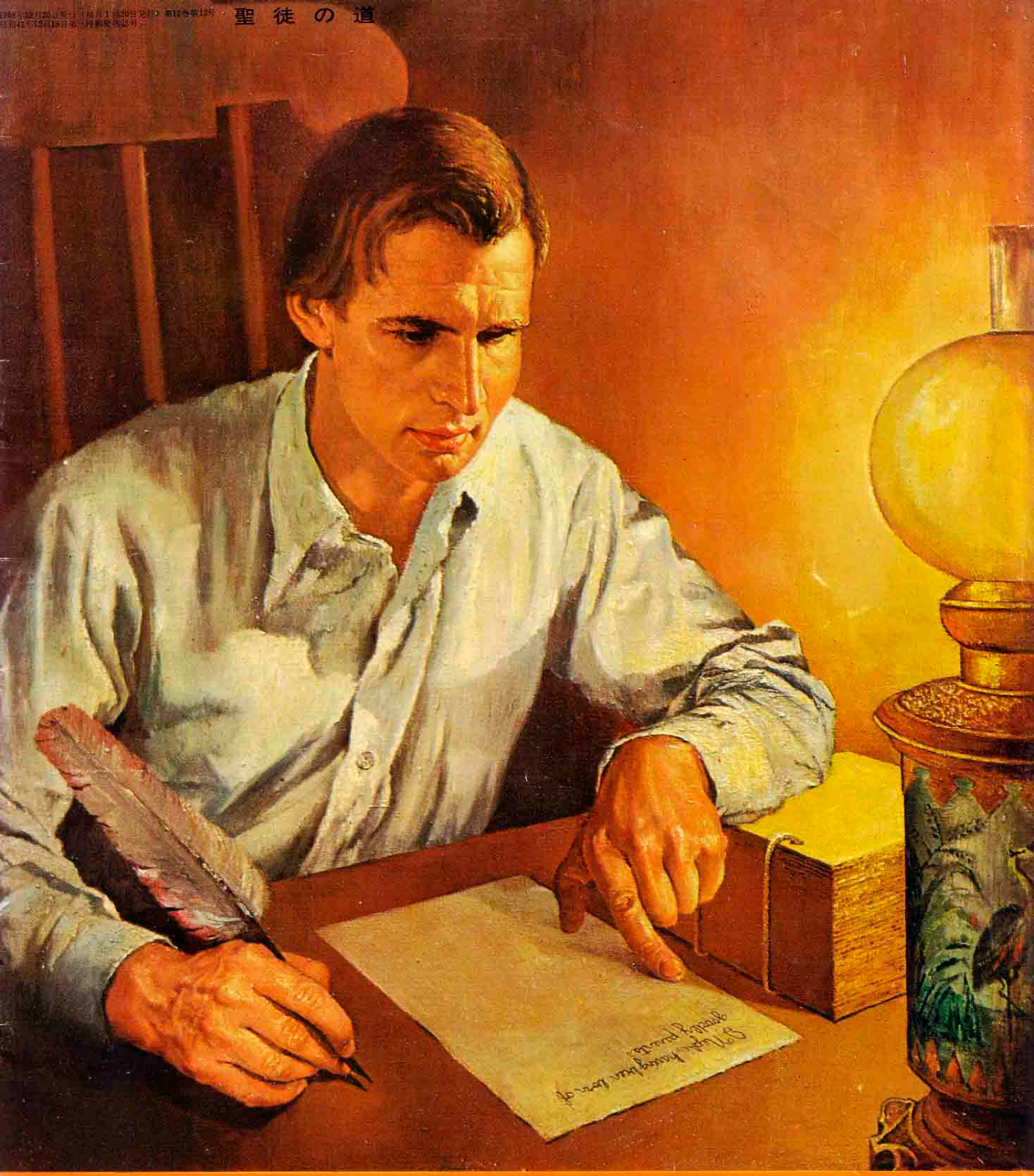
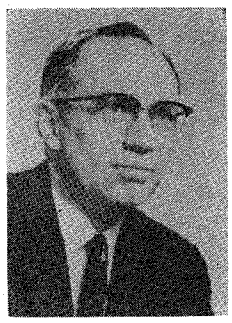
1965年12月20日発行 第12巻第12号
昭和42年12月18日第三種郵便物認可



聖徒の道 12

心の糧



十二使徒評議員
ゴードン B. ヒンクレー

すべての指導者，数多い教師，及び宣教師，家庭の頭たる人々に，あらゆる面で心身を養い育てるようにと心からお願いしたい。

確かに世界は霊の糧に飢えている。古えの予言者アモスは予言した。「見よ，わたしがききんをこの国に送る日が来る，それはパンのききんではない，水にかわくのでもない，主の言葉を聞くことのききんである。彼らは海から海へさまよい歩き主の言葉を求めて，こなたかなたへはせまわる，しかしこれを得ないであろう。その日には美しいおとめも，若い男もかわきのために気を失う。」（アモス８：11〜13）

地は本当に飢え乾いている。すなわち主の御言葉と霊の事がらにおおいに飢え乾いている。人を養い育てる義務と特権は私達にある。主の霊感と聖霊を絶えず求めなさい。それは努力して高い霊的標準を保つ時に祝福を与えてくれる。その祈りは必ず答えられるであろう。なぜならば次の啓示により約束されているからである。「神はその聖き『みたま』により，すなわち聖霊の言い尽き難き賜によりて，世の始めより今日に至るまで嘗て表したまいしことなき知識を汝らに与えたまわん。」（教義と聖約　121：26）

もくじ

予言者のことば
クリスマスシーズンを迎えて……大管長　デビド O. マッケイ……85
クリスマスの奇跡……ジョン・ロングデン……87
ジョニーにお祈りを教えて……ジェーン・ジェミソン……90
天命の少年……ヘイゼル W. ルイス……93
管理監督会のページ
決　　心……ジョン H. バンデンバーグ……96
扶助協会
クリスマスの子羊……エレイン M. ミューレイ……98
日曜学校
すばらしい体験……ルシル・ネルソン・ジェンセン……100
1968〜69年の聖句……102
若人のページ
福音の標準と人望……ポール　H・ダン……103
私の壁にかこまれて……ガリー　R・ハッチ……105
私の魂よ喜べ……トルデイ・リッチ……106
ＭＩＡ
ＭＩＡによる個人の進歩……マクシン　T・ショップ……107
伝道部長メッセージ……109
ローカル，ニュース……111
一つの心，一つの生き方……リチャード・エバンズ……裏表紙

子供のページ

クリスマスのおともだち……25
ちょうちょどろぼうのひみつ……28

教会歴史

12月23日

1805年予言者ジョセフ・スミス生まれる

今月の表紙

ジョセフ・スミスは特別に学校教育は受けなかったけれども，若くして神に選ばれ，モルモン経を翻訳し，福音を回復した。ジョセフ・スミスは1805年12月23日バーモント州シャロンに生まれた。今月はその誕生163回をお祝いする。

このクリスマスシーズンにあたり，私は救い主の生涯におけるある出来事にふれてみたいと思う。それは主がお与えになった霊的な話を聞いた人々が，その意味を理解しないために，主から去って行ったことである。その出来事は短い言葉で記されている。

「それ以来，多くの弟子たちは去っていって，もはやイエスと行動を共にしなかった。」

イエスは去って行くその弟子たちを見ながら，彼と共に残っている十二弟子に言われた。

クリスマスシーズンを迎えて

大管長

デビド O. マッケイ

「あなたがたも去ろうとするのか。」シモン・ペテロは真剣になって答えた。

「主よ，わたしたちは，だれのところに行きましょう。永遠の命の言をもっているのはあなたです。わたしたちは，あなたが生ける神の子，キリストであることを信じ，また知っています」。（ヨハネ　6：67～69　欽定訳聖書）

その霊的意味

あの命のパンに関する説教は，わずかなパンと魚で五千人に食を与えた奇蹟についでなされた。偉大な教師であったキリストは，福音の霊的な深い意味を人々に教えるために，その奇蹟を用いたのであった。人々はその意味を理解できないままに，パンを食べ満たされて，去って行った。その時イエスは十二弟子に向って，私が先に述べた質問をされたのである。後にイエスは十二弟子を近くの山上へ連れて行って，福音の霊的な深い意味についてさらに教えられた。その終りにイエスは「人々は人の子をたれと言っているか」とお尋ねに

なった。十二弟子は答えた。「ある人々はバプテスマのヨハネ（ヘロデに首を切られた）だと言っています。しかし，ほかの人たちは，エリヤだと言い，またエレミヤあるいは予言者のひとりだ，と言っている者もあります。」そこでイエスは彼らに言われた，「それでは，あなたがたはわたしをだれと言うか。」熱心なペテロは，今度はイエスと数日共に過していたので再び発言し，ためらいなく答えた。「あなたこそ，生ける神の子キリストです」。するとイエスは彼にむかって言われた。「バルヨナ・シモン，（キリストはこの時にペテロと呼ばなかった）あなたはさいわいである。あなたにこの事をあらわしたのは，血肉ではなく，天にいますわたしの父である」。（マタイ　16：13〜17）

世は証を必要としている

おそらくかってなかったほど，現在この世は主イエス・キリストの神性についての証を必要としている。我々は主の代理となり，主に従って永遠に若くあるように熱心につとめなければならない。ただ考えることのみが人間の行く末を決めてしまうとしたら，内なる霊が永遠であるという真理はうたがわしいものとなるのではあるまいか。救い主はその裏切られた夜に言われた。

「永遠の命とは，唯一の，まことの神でいますあなたと，またあなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることであります。」（ヨハネ　17：3）

そこでこの教えを我々はどのように理解するであろうか。

「神のみこころを行おうと思う者であればだれでも，わたしの語っているこの教えが神からのものか，それとも，わたし自身から出たものか，わかるであろう。」（ヨハネ　7：17）

知恵は努力によりもたらされる。あらゆる善い事を得るには努力が必要である。持つに価するものはみな人の肉体的，知的，精神的な力を求めるのである。

「求めよ，そうすれば，与えられるであろう。捜せ，そうすれば，見いだすであろう。門をたたけ，そうすれば，あけてもらえるであろう。」（マタイ　7：7）

しかし，あなたは求め，門をたたかねばならない。我々はこの大いなる真理についてもっと知ろうと心に決めなければ，我々自身に，愛する人々に，友人に対して真実ではありえない。内なる霊はこの古い世界に真理が存在することを証している。謙遜な人の熱心な，真剣な祈りと義と善き行いによって，イエス・キリストを知ることができるのである。

何を証しするのか

ミカ書の十五章に，ダビデの町ベッレヘムがメシヤの誕生の地であると予言者ミカにより述べられている。私は，このキリスト誕生の啓示を与えられた羊飼たちが，自分たちの群の番をしていた時に，その予言を覚えていたか，また全べてのユダヤ人のように，メシヤがすぐに降誕するという希望を抱いていたのかはわからない。その謙遜な人々が神の示現を開いたのである。

「御使たちが彼らを離れて天に帰ったとき，羊飼たちは『さあ，ベッレヘムへ行って，主がお知らせ下さったその出来事を見てこようではないか』と，互に語り合った。」（ルカ　2：15）

羊飼たちは「これは本当だろうか」とか「この出来事が本当なら見に行こう」とは言わなかった。彼らは「主がお知らせ下さったその出来事を見てこようではないか」と言ったのである。すなわち，神が御子をあらわし，王の王，主の主となるお方があの小さなユダヤの町の最もいやしい所で，ただの赤児としてお生れになり，そのしらせを天使がもたらしたという確信を述べたのであった。神が天の御使たちにより，その誕生を予告されたキリストがお生まれになり，生きてましますという確信を持つことが，その確信を持たない人々に何を与えることになるであろうか。その人々のあらゆる疑いは消え，現世の目的に関する心配がなくなるであろう。それこそこのような証しをする意味なのである。

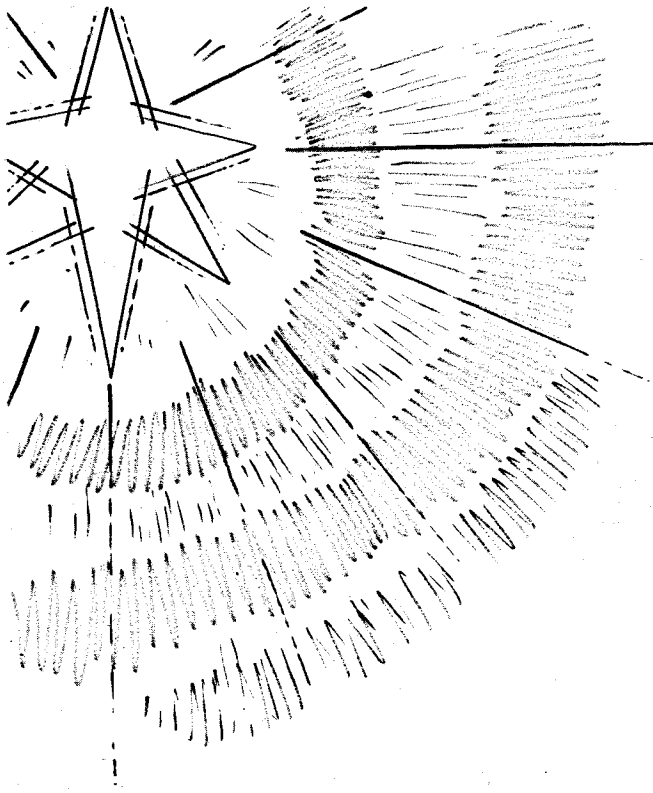
「生ける神の子キリスト……」

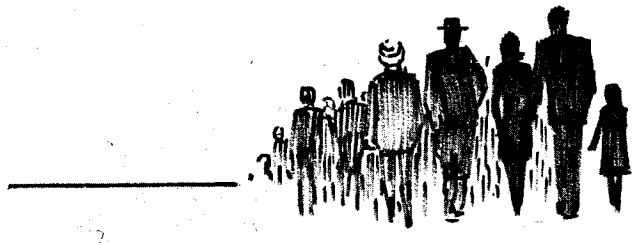
このクリスマスに御子の誕生を祝う時，主の教えと生活が今までよりも一層美しく，必要なものとなり，人間の幸福により一層適用できるようになることを願ってやまない。私は，この地上に人が置かれた最終目的は，人間性の完成にあるということをなににもまして固く信じている。私はイエス・キリストを人間完成の典型，肉体に顕わされた神，人類の救い主，慰め主として，心から受け入れている。イエスを慰め主，救い主，主として受け入れる私は，その福音を救いの計画，人間の幸福と平和を得る唯一の完全な方法として受け入れるのである。主がお教えになった教えの中で，人類の成長発展，幸福に適用できないような原則は何一つ存在していない。私には主の教えの一つ一つが真の人生観に深い影響を及ぼしているように思われる。私は主の教えを全身全霊をもって受け入れるものである。

世界中の失望と落胆の状態にもかかわらず，クリスマスは一年中で最も幸せな季節である。

しかし，救い主イエス・キリストの教えと模範に最も近づいた日常生活をする人々が，最も祝福されるということを心に留めておこうではないか。主の降誕の時に次のように宣言された。「……地の上では，み心にかなう人々に平和があるように。」（ルカ　2：14）

このクリスマスの祈りと讃美において，人々が主に近づき，ありとあらゆるところに住む人々の心に天父の平安があらんことを。願わくば，病める人々が回復され，悲しむ人々が慰められ，さびしい人々が心を励まされ，疲れはてた人々がやすらぎを与えられ，貧しい人々が糧を与えられ，疑いを抱く人々が確信を受け，悪しきたくらみある人々の企てが破れんことを。





クリスマスの奇跡

十二使徒評議員会補助
ジョン・ロングデン長老

初めに，つい最近，私の心を強くとらえた実際の話についてご紹介したい。クリスマスのためにいつもより多くお金をもらった少女が，友人と買物に出かけた。彼女は店に近づいた時近くに立っていた若者に心をとめた。しばらくして店を立ち去る時にも，まだ若者はそこに立っていたので，彼女はその若者のそばへ行って尋ねた。「ご両親を待っていらっしゃるの？」

「いいえ，両親はいません」

「そう……寒くはないのですか」

彼は少女をみつめて言った。「今は寒くありません。あなたが話しかけて下さったから。」

彼女は感動して言った。「私が戻ってくるまでここに立っていて下さる？　さあ，どこかに行かないって約束しましたよ。私が帰ってくるまでここにいらっしゃるのよ」若者は約束をした。

少女は店に入って若者のために暖かい衣服を買って戻ってきた。

「あなたは神さまの奥さんみたいだ」そう言う若者に少女は答えた。

「いいえ，でも私は神さまの子供，あなたもそうなのよ。」

「そうですか，ぼくは，あなたはきっと神さまと関係のある人に違いないと思ったんだ」

確かにそうである。我々は馬小屋でお生まれになった幼な児キリストに関係がある。あの少女はものを贈ったが，自分自身の心をもプレゼントした。物質だけを贈ったり受けたりすることからは，地に平和がもたらされない。地に平和をもたらすのは，あなたや私など一人一人の心の精神である。

イエスは愛の福音をたずさえて来られた。世はイエスを，科学者，発明者，芸術家，政治家としてほめたたえてはいない。イエスの偉大さはどこにあるのであろうか。それは，性格および霊性にあるのである。主は言われた，「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与

もし誰れかが，人々の顔に表われた輝きをはかれる計器を発明したなら，節に人々は最良の思いと最も深い感動と最高の心を内から輝かせる。クリ

える。……」（ヨハネ　14：27）

イエスは模範を示したもうた

イエス・キリストは自らを罪の世に与えたもうて，自分のことを考えずに与えることの模範を示された。イエスは御父の模範に従われたのである。「神はそのひとり子を賜わったほどに，この世を愛して下さった。……」（ヨハネ　3：16）我々はみな，物質だけに終らないものを与えなくてはならない。

ヘンリー・バン・ダイクの言葉から引用しよう。

「あなたは他の人々のためにしてあげたことを忘れて，他の人々があなたにしてくれたことを覚えていようとするだろうか。みんなのためにしてやったことには心を留めず，みんなから受けたことを考えようとしているだろうか。幼ない子供の願いや望みを，いっしょになって考えてやり，年老いた人々の弱さを思いやろうとしているだろうか。友人が自分をどれだけ愛しているかをはかろうとせず，自分が彼らを真心から愛しているかどうかを考えようとするだろうか。あなたはこれらのことを，この日一日は喜んで行なおうとするのだろうか。もしそうならば，あなたはクリスマスの精神を実践しているのである。この一日クリスマスの精神を守れるならば，なぜいつもそれができないのであろう」

平安を得る方法

平安と進歩を得る一つの明らかな方法は，発見ではなく，再発見にある。それは，歴史に起こったことばかりでなく，時の限界を越えて将来を読むことのできた一人の人から与えられた。その方は二千年の昔に，簡単な言葉でこう言われた

「……『心をつくし，精神をつくし，力をつくし，思いをつくして，主なるあなたの神を愛せよ』。また，『自分を愛するように，あなたの隣り人を愛せよ』……」（ルカ10：27）

イエスはヨハネ伝で言っておられる。

「盗人が来るのは，盗んだり，殺したり，滅ぼしたりするためにほかならない。わたしがきたのは，羊に命を得させ，豊かに得させるためである」。（ヨハネ　10：10）

キリストは圧制の時代にお生まれになったが，平和の君であった。圧制の犠牲となって殺されても，愛の福音と隣人との和解を教えたもうた。キリストは，調和と平静と良い心のいわば権化であった。平和の主の他，どこに平和を見出せようか。クリスチャンでない人々も平和を知っている。しかし主に叛いたクリスチャンは平和を知っているであろうか。救い主は言われた。

「すべて重荷を負うて苦労している者は，わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。わたしは柔和で心のへりくだった者であるから，わたしのくびきを負うて，わたしに学びなさい。そうすれば，あなたの魂に休みが与えられるであろう。わたしのくびきは負いやすく，わたしの荷は軽いからである」（マタイ　11：28〜30）

あらゆることを言い尽してのち，これこそが，世における平和と戦いの問題に対する答えではなかろうか。それがクリスマスのメッセージではなかろうか。

クリスマスの精神

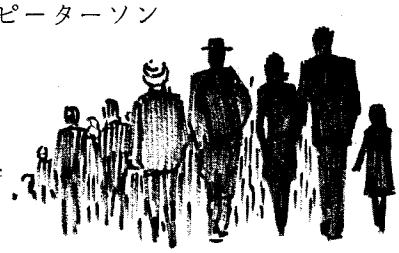
ウィルファード A. ピーターソンは，「不思議な精神」と題して，美しい言葉で思いを語っている。

「ある意味で，我々はみな電気のスイッチのようなものである。我々を通して輝き出すクリスマスの不思議な力は我々しだいである。我々はクリスマスの理想を自分の生活につけたり切ったりする力を持っている。人格を変化させるクリスマスの力は，家庭にある電気と同じように，使いたいと思う時にいつでも使うことができる。我々はやみの中で生活することもできるし，光の中で生活することもできる。我々しだいである。

我々は一年中ほとんど，善意と喜びと寛容のろうそくを灯している。その小さな炎は，とりかこむ悪意や利己主義や憎

その針はクリスマスの季節に一番高くなることであろう。クリスマスの季スマスは人を燃えたたせるのである。

ウィルファード A. ピーターソン



しみの暗やみをわずかに貫ぬくだけに過ぎない。そしてクリスマスの時には，……奇跡が起こる。人々は霊の電気のスイッチを発見するのである。そのわずかな時には，世界が希望と愛，信仰と親切と平和とに輝くのである。

クリスマスの霊の電気はいつも使えるというのに，我々はなぜ霊のろうそくやランプにあともどりをするのであろうか。それはまるで，一年中の数日しか電力を使わないで，あとの日々を旧式なやり方ですごすのと同じである。電力が一年中いつでも使えるように，クリスマスの不思議な精神は一年365日を通じていつでも使えるものである。

もし誰れかが，人々の顔に表われた輝きをはかれる計器を発明したなら，その針はクリスマスの季節に一番高くなることであろう。クリスマスの季節に人々は最良の思いと最も深い感動と最高の心を内から輝かせる。クリスマスは人を燃えたたせるのである。

町に光と力を与える発電機は年中使える。深い意味をこめたクリスマスは霊の発電機である。それは，世を照らして燃える人の霊の光を生じる。もし我々が一年中を通じてクリスマスの不思議な精神を輝かしているならば，世界は変わるであろう。そのスイッチは我々の心の中にあるのだ。

あるたとえ

イエスが語られたものではないが一つのたとえを引用しよう。「なぜイエス・キリストが？」という題である。

「フリバーグにおける大きな教会のオルガニストの語った話がある。ある日オルガンの前に座って曲を弾いていると，見知らぬ人が来て，彼の後ろに立った。三十分位してその人は言った。『私にも弾かせていただけませんか』彼はオルガニストに断わられたが，それでも待っていた。休み時間になってまた頼まれたオルガニストは，ついにいやいやながら，その人に席をゆずった。

見知らぬその人は椅子をひいて座り，少しの間，鍵盤を見ていた。そして彼はすぐに弾き始めたが，それは大きなそのオルガンからかって聞いたことのないほどに壮大で心をうつ演奏であった。教会中を満たして天井をつきあげ，眠っている天使の目をさまし，石柱も喜びで叫び出すようであった。圧倒されたオルガニストは見知らぬ人の肩をつかんで，『あなたは一体どなたですか』と尋ねた。

『私はフェリックス・メンデルスゾーンです』。

見知らぬ人はそう答えた。

『ええっ，私はもう少しのところでメンデルスゾーンにオルガンの使用を断わるところだったんですか』」

これはたとえである。あなたが自分の生活をイエスの生活と一致させたいならば，主人である弾き手に奏演していただかねばならない。主人はあなたが弾くよりもずっと素晴らしい曲をかなでる。ふつうの生活は天と調和する生活に変わることもできる。人生を終える時に我々のうちのどれだけがこう言うであろうか。「私は人生の鍵盤をイエスに弾かせることを拒んでしまった」。

1513年の「クリスマスの言葉」

400年以上も前の1513年に書かれたクリスマスを祝う言葉を，ニューヨークのスカースデイルに住むロバート・アプデグラフが発見した。あなた方もフラ・ジョバンニの書いたこのクリスマスのメッセージから，深い感銘を受けるに違いない。

「おめでとう！　私にはあなたにないものを差しあげることができない。だが私が与えることはできなくとも，あなたが受けとるものは数多い。

私たちの心が今天国に休めなくては，天国が私たちにやってくることはない。天国を受けたまえ。将来の平和はみな，今は隠れている。平和を受けたまえ。世の暗がりはただの影だ。その後の手の届くところに喜びがある。喜びを受けたまえ。

そして，今も永えにもあなたの日々が晴やかに明けて影が飛び去るように，その祈りをこめて，クリスマスおめでとう」

ジョニーにお祈りを教えて！

ジェン・ジェミソン

エレン・ブレアはじっと座っていた。病院の廊下にあるガラスのドアを通して射しこんでくる朝の陽の光が，壁にこまやかな模様を描いていた。窓の外のヒノキにとまるつばめがさえずり始めて，彼女は夜通しの長い看病が終ったことに気がついた。

心は深く沈んでいた。夫のミカエルがそばにいてくれることがとてもうれしかった。昨晩夫が電話を受けて，このバリー病院へ呼ばれたのだった。高校の卒業式のすぐあと，交通事故にあったのだという。息子のロバートはまだ晴れの衣装のまま，大けがをしていた。

エレンは，救急室に運ばれ意識不明で真青な顔をして動かなかった長男の顔を思い出すまいとするかのように，またたきをした。

「脳震とう，頭蓋骨骨折」と医師は診断した。

「脊椎に血がたまっています。出血の原因を調べるためにすぐ頭を切開してみます。脳内出血を止められればチャンスはあります。もし止められなかった時には……」医師はそのあとを言わなかった。

二人はそれぞれに心の中で祈りながら何時間か待合室にすわっていた。息子が重傷であることを思い出すと，エレンは身震いがした。

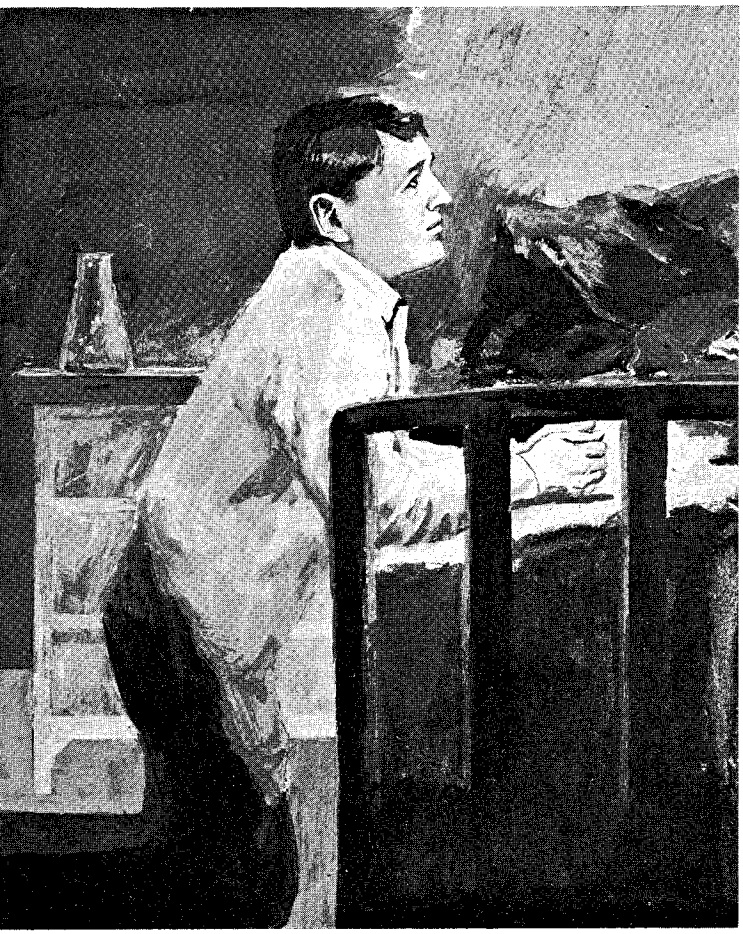
すると突然，夜明けの静かな空気を破って，ロバートの一番親しいジョニー・ハンセンが部屋にかけこんできた。髪は乱れて，洋服の様子からも大急ぎでかけつけてきたことがわかった。「ボブについて聞きました。どうなのですか！」

ジョニーは二人の心配そうな表情から，その答えを知った。エレンはロバートの事故の重大なことを言おうとしたが，声も出ずにしゃくり泣いた。夫が引きついでジョニーに説明した。すすり泣きが落着いてくると，エレンの心にはこの同じ病院でロバートが生まれた18年前の８月からの日々が思い浮かんだ。小鳥のひなのようにやせて赤い顔をした小さな赤ん坊だった。時は何と早く過ぎたことだろう。クリスマスに贈られた新しい三輪車を懸命にこいでいたのもつい昨日のように思える。あっという間に学令に達して，ジーパンにシャツを着て走りまわるほどに成長した。そのあり様を永久に心に刻んでおきたいと幾度思ったことであろう。しかしロバートはとどまることなく成長していろいろな活動に熱心に参加するようになった。プライマリーで新しいことを学び，カブスカウト（年少隊）で新しい経験を積んだ。

ハンセン一家はこの土地へ引越してきて，ロバートにお菓子を持たせて隣りの家をたずねさせ，その帰りにジョニーの家に連れてきたのであった。

間もなく，エレンはジョニーの環境がロバートの環境とまるで違っているのを知った。ジョニーの家庭の標準や理想は正反対であった。飲酒や喫煙や汚ない言葉はいつものことであり，彼らの生活には宗教が何の役割も果たしていなかった。エレンはロバートがジョニーと親しくなるのを喜べなかったが，二人は磁石のように仲良くなった。

ジョニーはロバートより三歳年上なので，八歳にしてはとても大人に思えた。二人はいつもいっしょにいた。当然のこととして，やがてジョニーはロバートについていっしょにプ



ライマリーに出席するようになった。

ある日二人はプライマリーのあと，競争して家へ帰ってきた。先に玄関についたジョニーは，やがて追いついたロバートが母親の手をひっぱって廊下へ連れていった間恥ずかしそうに立っていた。ロバートは母親にささやいた。

「お母さん，ジョニーにお祈りを教えて！」

母親は，いつもはぶっきらぼうで粗野なのに，今は恥ずかしそうにそっと立っている少年をみて，胸にこみあげるものを感じた。今度の水曜日のプライマリーの開会の祈りを頼まれたのだという。

「もちろん，喜んでお手伝いしますよ」彼女はそう言って子供たちを居間へ案内した。

「本当のお祈りってどんなものか，知っているでしょう，ジョニー」

「うん，知っていると思うけれど……」

「イエス様は私たちが信じて祈るなら，正しい願いはなんでも聞きとどけて下さるっておっしゃったのよ。」

「そう？」

「そうよ，お祈りは言葉だけではないの。天のお父様といっしょにお話をすることなのよ。あなたは教会でこんな讃美歌を聞いたでしょう。『祈りは魂の見えぬのぞみ……』」彼女は讃美歌を少し口ずさんだ。

「うん」

ロバートがつけ加えて言った。「お母さん，その歌，プライマリーの大会で歌ったよ」

「お祈りの中では，神様を敬まって，ていねいな言葉を使うのよ。お祈りの第一は，たくさんいただいている祝福に感謝することです。あなたもきっと受けている祝福に気づいているわね。」

「良いことはみんな祝福なんでしょう」とジョニーは答えた。

彼らはいっしょに，祈りの簡単な方法を紙に書いて，ジョニーに説明した。

次の水曜日にプライマリーから帰ってきたロバートは，いつもの元気なロバートではなかった。ジョニーが見あたらなかった。エレンは思わず聞いた。「ロバート，ジョニーのお祈りはどうだったの？」しかしロバートは何も答えずに自分の部屋へ入って行った。

エレンは心配になったが，それ以上聞かないで，翌日マーケットで会った時にプライマリーの会長をしているリンドレー姉妹に聞いた。

「ああ，ジョニーはお祈りをしたんですよ。けれど，こわがって聞きとれないほどの声で少しのことを言っただけで，部屋の外へかけ出していったのです。」

エレンは，ジョニーを夕食に招いたある夏の晩のことを思い出した。子供たちをテーブルに呼んで，みんなで家族の祈りをするために膝まずこうとした時，ジョニーはいやなような様子だったため，「いっしょにお祈りをしましょう」と誘ったのだった。

ジョニーがうなずいてロバートのわきに膝まずいた時，窓の外からハンセン氏の大きな声が聞こえてきた。「ジョニー！　ジョニー！」うちの野郎はどこにいる？　うちへ帰ってこい！」

「おれ，帰る」そう言ったジョニーの首すじがぽっと赤く

染まったのを彼女は覚えていた。

父親にみつかるのを恐れて，ジョニーは裏口のドアからそっと出ていった。

ロバートが神権を受けた夏に，ジョニーもバプテスマを受けたいと言った。彼がバプテスマを受けて後，二人の結びつきはさらに深くなったように見えた。やがてジョニーも執事に聖任された。彼が夫のミカエルに，定員会の集会で聞いた聖句を教えてくれと頼んだことを，エレンは記憶している。「……だれもこの栄誉ある務を自分で得るのではなく，アロンの場合のように，神の召しによって受けるのである」という聖句であった。

ミカエルは静かにこう教えたのだった。「ジョニー，イエス・キリストでさえ，神様から召されたのだよ。イエス様は神権を十二使徒を通して地上に残して行かれた。そして使徒たちは，キリストの教会に大きな背教の時代が来て神権が失われるまで，確かに神権を使っていたのだよ。」

「じゃ，どうして今も神権があるの」

「君は，ジョセフ・スミスの話を知っているかい？」

「はい，よく知ってます」

「そう，1829年に天の使いたちがジョセフ・スミスを通して神権を回復して下さったね。」

「じゃ，みんなは予言者から神権を与えられたんだね」

「予言者ジョセフ・スミスかオリバー・カウドリから与えられたのだ。彼らは同じ時に神権を受けたのだよ。」

ミカエルは神権とその真の目的について，少年たちに理解できるようによく説明し尽せなかったと感じたが，彼らが神権について関心を抱いたことを感謝していた。

ジョニーは祭司に聖任されてまもなく，日曜学校で聖餐の儀式を行なうように頼まれた。それを断わったジョニーに，祭司定員会の指導教師は簡単だからと言って，祈りの言葉を書いたカードを聖餐のテーブルの上に置いて読んでもよいと言い，ついにジョニーもどうにか承諾した。

最初に年若い祭司がパンを祝福して，次はジョニーが水を祝福する番になった。彼はためらい勝ちに始めて，すぐにやめてしまった。言葉を間違えたのだった。もう一度初めからやりなおしたジョニーは，またも間違えてしまった。監督にもう一度繰り返すように言われて，二度めを言い始めた時もまた失敗して絶句してしまった。集会には緊張した空気が流れた。すると突然ジョニーが立ちあがって顔を紅潮させて礼拝堂を出ていった。他の祭司が静かに立ちあがって彼に代わり，水の祝福を終えた。ジョニーは数週間を経てから教会へ戻ってきたのだった。

ブレアの家族は，ジョニーが高校を卒業したらどうなるかを懸念していた。二人の少年の友情は失われるのだろうか。しかし大学へ進んでもジョニーのロバートに対する心は変わらず，二年の前期の頃彼は結婚したいと思う女性のことについてロバートに手紙をよこした。「ボブ，彼女は素晴らしいんだ。その上教会員なのだ。ぼくたちが神殿で結婚する時は君のご両親に列席していただきたい。」

エレンとミカエルは神殿でのジョニーの結婚式につきそった。彼らが聖壇にぬかずくのを見ていたエレンの心には，ロバートが幼なかった頃の言葉が浮かんできたのだった。「お母さん，ジョニーにお祈りを教えて！」

たんかが廊下に運ばれてきて，エレンは急に現実にひき戻された。頭に包帯をまかれて微動だにしないロバートを見ると，彼女はまたも非常な恐れにとらわれ，おろおろして夫とジョニーの顔を見た。涙がほおをつたった。

たんかが部屋に運ばれて，部屋の扉が閉じられた。次に扉が開いた時には，白衣を着た男の人が空のたんかを押してきて，看護婦がドアのところへ来て告げた。

「専門医のクレイン先生はまだ執刀中です。でもじきにまいられます。さしあたってスノウ先生がまいります。」

医師と看護婦は，ミカエルとエレンとジョニーを残して部屋へ入って行った。

時間はどれだけ過ぎたかわからない。やがてスノウ医師が現われて三人を中へ入れてくれた。「息子さんは反応を示しません」ケレン先生を呼びます。おそすぎないとよいのですが……」「ええっ，そんな……」エレンはすすり泣いた。

「あの……彼のために祈りましょうか？」ためらうようなジョニーの声がした。

ジョニーは無我夢中でぎこちなくベッドのわきに膝まずいた。心の奥底からこみあげてくる言葉は飾らぬ深い思いを吐露していた。ロバートから受けた数々のことを感謝し，自分の生涯を変えた教えに感謝を述べた。ジョニーは，その友のために確信をこめて祈った。「……しかし天父なる神さま，他のどんなことよりも，ただこのことを……私たちの思いのままではなくあなたさまの御意がなされますようにと祈ります。私たちに理解する知恵をお恵み下さい。」

ドアがあいて，手術衣のままのクレイン医師が現われた。「スノウ先生から聞きました。我々は尽くせる手をすべて尽しました。ご心配でしょう」クレイン医師は静かに言った。

医師は習慣的に患者の脈をとり，むずかしい顔をして毛布をひきあげ，聴診器をあてて，何カ所かを調べた。困ったようにまゆをよせていた。

しばらく黙っていた医師は看護婦に言った。「酸素吸入器を使って」

エレンの心には再びロバートの声が聞こえた。「お母さんジョニーにお祈りを教えて！」

天命の少年

ヘイゼル W. ルイス

予言者ジョセフ・スミスの幼年時代のことはほとんど知られていません。彼の母親でさえも息子の伝記の中で，「ジョセフが子供の時分には，当時のあの程度の暮らし向きの人達にとっては極く当り前の平凡な事柄の他には，これと言って特別なことはありませんでした。」と述べています。多分，ジョセフの両親にとっては，次々と生まれ，そして日毎に成長する子供達を抱えて，生計を維持するのに精一杯だったのでしょう。それで母親のルーシイ・マック・スミスにとっては些細な事柄をいちいち数えあげるだけの余裕もなかったのでしょう。

母親はジョセフの幼少時代には格別なことはなかったと言っていますが，ジョセフは他ならない次のような環境で育っているのです。つまり，両親，兄弟，姉妹達に対する強い愛こそ幸福な家庭の要であるというような雰囲気の中で成長したのです。家族はしばしば生活の必需品にも事欠くほどでしたが，子供達は働くことを学び，信仰を持つことを学び，そしてお互いに誠実であるべきことを学びました。これらの諸徳は生涯に亘りジョセフを助けました。

クリスマスの二日前

ある冬の寒い日，1805年12月23日のことでした。バーモント州，ウィンザー郡のシャロンのスミス家に男の子が生まれました。母親は新しく生まれた子供をしっかりと抱きしめて他の三人の子供達，つまり，七才のアルビン，五才のハイラム，それにまだたった二才のソフロニアに，赤ん坊はお父さんの名前をとってジョセフと名付けられると語りました。この時，母親はジョセフがこの地上での生涯の間に為すであろう偉大な働きについては何も気がつきませんでした。スミス一家がシャロンに住んでいる間はジョセフの父は農場を借り，夏の間はそれを耕しました。スミス一家はバーモントとニューハンプシャーの郡境にある町々を幾度となく移り住みました。ジョセフがまたほんの子供の時分，一家はシャロンからタンブリッジへ，次いでロイアルトンへ，それからニューハンプシャーのレバノンへ移りました。

不幸の訪れ

ジョセフが生まれてから，一家がレバノンへ移り住むまでの間にスミス家では更に三人の子供に恵まれました。サムエル，エフライム（この子はたった10日間しか生きていませんでした）それにウイリアムの三人です。

一家がレバノンへ移った時，彼らの前途は非常に明るいものでした。ジョセフの母はこの時のことを次のように語っています。

「私達はこの町に落ち着くことにしました。明るい前途は今までの私達の努力の結果であるという，喜びと満足の気持を味わいました。私達はもっと豊かな生活ができるように今までに倍して勤勉に働きました。」

レバノンへ移って間もなくのことでした。ジョセフの妹のキャセリンが生まれました。スミス家の子供達は学令に達しておりました。ハイラムはハノバーのアカデミーへ行っておりました。他の学令の子供達は普通の学校へ通いました。学校では，読み方，書き方，それに簡単な算術を勉強しました。スミス家の人々は信仰深い家族でした。夜にはかわるがわる聖書を読みました。

全く突然にこの一家を再び不幸が襲つたのです。今度の不幸はチフスという非常に伝染力の強い病気の形でやってきたのです。真先にソフロニアがチフスにかかり，次いでハイラムが学校でかかり，次にアルビン，それから次々と他の子供達がこの恐しい病魔の犠牲になりました。病魔の手から逃れたのは両親だけでした。

主は私を助けて下さる

チフスにかかった時ジョセフは八才でした。回復の兆は見えてきましたが。ジョセフは激しい肩の痛みを訴え始めました。医者はこの痛みはねんざによると考えましたけれども，ジョセフはそのような覚えは全くないと言い張りました。医者は塗薬で治療しましたが効果はありませんでした。数週間後もなおジョセフの肩はいてもたってもいられないほど痛みました。痛みは背中に拡がり次いで脚にも及びました。脚は腫れはじめ非常な苦しみようでした。二，三週間後に医者が来て二回にわたって脚を切開しました。この処置は痛みを和らげましたが切開部が治るとまた脚は腫れはじめ余りにもそれがひどいので数人の外科医が呼ばれました。話し合いの結果，医者達は今となっては脚を切断することだけがジョセフの命を救う唯一の方法であるとの結論に達しました。母親はとても胸をいため，医者に脚を切断しないで，冒された骨だけを切除することによってジョセフの命を救えないだろうかと尋ねました。彼らはそうすることに決めました。

この当時は今と違って麻酔薬は用いられませんでした。それで医者は手術を始める前にジョセフをベットに縛りつけようとしました。けれどもジョセフは勇敢な若者でしたので縛り付けられるのを拒否したばかりか，医者が痛みを和らげるからと勧めるブランディーやブドウ酒を飲むことさえも拒んだのです。ジョセフは言いました「僕は一滴の酒も飲まないし，ベットに縛りつけられるのも嫌です。その代りお父さんにベットの傍に座ってもらい，しっかりと僕を抱きかかえていて欲しいのです。そうすれば骨を切り取るのに必要なことなら何でもします。」ジョセフは母親が苦しむのを見るのが辛いので，部屋の外へ出て行ってくれるようにと頼みました。「お母さん，どうか約束して下さい。部屋にいないと，主は僕を助けて下さいます。僕は我慢します。」

ジョセフはこの困難な手術を受けてから徐々に回復していきました。両親は息子の健気さに感嘆しました。ジョセフは療養期間中叔父のジェス・スミスとマサチューセッツ州のサレムに行っておりました。両親が海の爽やかな風が息子のためによいだろうと考えたからです。事実，彼の体は回復し脚は段々丈夫になってきました。レバノンへ戻って来た時には軽いびっこをひいているだけでした。

パルマイラへ

子供達全員がすっかり回復してから，家族はコネティカット河を渡ってバーモント州のノーウィッチへ移住しました。ここでマドック氏の所有する農場を借りました。二年間というものは，不作が続きました。三年目にはひどい霜がまた作物を駄目にしてしまいました。この時スミスは農業に適した土地を求めてニューヨーク州へ行こうと決心しました。もし良い土地が見つかれば妻と八人の子供を呼び寄せることにしました。（ドン・カーロスという子供がかれこれする内に生まれておりました）

後に残った母親と子供達はパルマイラへ幌馬車で行けるように準備に精を出さなければなりませんでした。ジョセフの母は言っております。「来ても良いという知らせが何時あっても直ぐに出発出来るようにと，私とそれにもう働ける年頃の子供達は一生懸命に働きました。」

ほどなくしてジョセフの父はみんなが来るようにという手紙をよこしました。

樺の木のほうきとショウが入りパン

ニューヨーク州へ移住した時，ジョセフ・スミスは十才でした。最初の二年間は，スミス家では人口2,187人のパルマイラという町で家を借りて住んでいました。農場の借料を工面するため家族はそれぞれ働きに出ました。アルビンは大工の見習いとしての仕事を見つけ，開拓者達の家を建てる人達と働きました。ジョセフの父は非常に器用な人でしたので割木で椅子を作ったり，かごを作ったり，樺の木でほうきを作ったりしました。また，井戸や溜池を掘ったり，暖炉や石壁を築いたりしました。その他に刈り入れ時には手伝いに出かけたりしました。時には手伝わせるためにハイラムとジョセフを連れていくようなこともありました。一方，ジョセフの母は料理が上手な人でしたので，ケーキと飲物の店を始めました。店は繁昌しました。特に土曜日とか休日には沢山のお客が集まりました。近所の子供達にとってはジョセフの母の作るショウガ入りパンは非常な楽しみでした。ソフロニアは何時も自分から進んで店の手伝いをしました。店では食物の他に油布で作った防水具や，ジョセフの母の手作りの椅子カバーを売りました。

学令の子供達はパルマイラの小さな丸太作りの学校へ通いました。ジョセフの学校時代のことについてはほとんど書き誌されていませんが，パルマイラの学校時代には少くとも三冊の教科書を使用したということが明らかにされています。

「初歩の算術」これには彼の自筆と1818年1月31日という日付が誌されています。「英語読本」，それに宗教的な読み物の三冊です。

何時も疑問を持っている少年

ジョセフの14回目の誕生日を祝ってからほどなくして，色々な宗派（バプテスト，メソジスト，長老派）の宣教師が改宗者を求めてパルマイラの近隣へやって来ました。スミス家の人達や近所の人達は宣教師の開く集会へ出かけました。集会は時にはマンチエスターの学校で時にはパルマイラで開かれました。スミス家の人達はこれまでずっと信仰深く，何時も聖書を読む家族でした。けれども教会には加入していませんでした。結局，母親のルーシィと子供達の中ソフロニア，ハイラム，サムエルが長老派の教会へ加入することになりました。ジョセフは，何時も疑問を持ち何時も真実を求めている少年でしたが，いずれの教会に加入すべきか分りませんでした。父とアルビンはメソジスト教会へ加入しました。と言うのは，二人はメソジスト教会の宣教師リバレンド・レーンの説教に非常に興味をひかれたからです。ジョセフはこの人の説教を聴いてみました。この時の話の中で彼が聖書の中から読んだある聖句がジョセフに強い印象を与えました。それで家へ帰ってからリバレンド・レーンが引用した聖句を読みました。

「あなた方の内，知恵に不足している者があれば，その人は，とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に願い求めるがよい。そうすれば与えられるであろう」（ヤコブ　1：5）

この聖句はジョセフに深い感銘を与えました。ジョセフは，どの教会が正しいのかを決定するのに知恵を必要としていることをよく知つておりました。ジョセフは神に尋ねようと決心しました。

ジョセフが祈りを捧げるために森へ入って行ったのは1820年の春の美しい朝でした。これまでは天父なる神に対して声に出してお祈りをしたことはただの一度もありませんでした。ジョセフはひざまづいてお祈りを始めました。その時，何か強大な力で体が捕えられたような感じがし，しかもその力が余りにも強いのでお祈りの言葉を言うのさえ難しいほどでした。暗黒がジョセフの周囲を包み，彼はもはや滅亡するばかりだと感じました。このような事を感じたちょうどその時，ジョセフは自分の頭の上の方に光の柱を見ました。その光の柱は太陽よりも輝いて見えました。この輝く光はだんだん降ってきてジョセフの真上にやってきました。この時，ジョセフは光輝くこの世の人とは思われない高貴な二人の御方が彼の上方の空中に立っているのを見ました。その内の一人の御方が他方の御方を指さして言われました。「これはわが愛子なり，彼に聞け」（ジョセフ・スミス　2：17）

そこでジョセフは尋ねました。「一体今ある宗派の内いずれの宗派が正しいのですか。また私はどの教会に加入すべきなのですか。」

僕は自分で真実を知りました

答はいずれの宗派も正しくない，またいずれの教会にも加入すべきでないということでした。ジョセフが我れに帰ってみると，彼は地面に仰向けになり天を見上げた格好で横たわっていました。少し元気が回復してからジョセフは家へ帰りました。

ジョセフが家へ帰り着くと，母親は息子の様子を見て非常に驚きました。ジョセフの顔色は蒼白で，しかし目だけは生気に満ち満ちていました。なぜジョセフがいつもとそんなに違った素振りをするのかと母親が尋ねると，ジョセフは言いました。「僕は自分ではっきりと長老派の教えは真実でないということを知りました。」

そのことのあった日から，家族の人達は，若いジョセフが本当に天父と御子に会ったということ，またこの御二方がジョセフに今ある教会はどれも真実でないとお告げになったということを信じました。

弟のウイリアムが成人になってからのことでしたが，ある人がウイリアムに今までにジョセフの証詞を疑ったことがあったかどうかとききました。ウイリアムは答えました。「いいえ，私達は何時もジョセフの言ったことには絶対的な信頼をおいていました。彼は正直な少年でした。父も母もジョセフを信じていました。ましてや私達子供がどうして信じられないということがあり得ましょうか。もしジョセフがそれまでに作り話などをしたことがあったのなら，私達はきっと金版についての彼の話を疑ったかも知れません。でも彼は正直な少年だったのです。父と母がジョセフの話を信じて，その信念のために迫害を受けたという事実は，ジョセフが正直な少年であるということを何よりもよく物語っています。私達はかた時と言えどもジョセフの言葉を疑ったことはありません。」

決　　心

管理監督　ジョンH.バンデンバーグ

キリスト降誕のおよそ800年前，予言者ヨエルはさまざまなチャレンジを伴う我々の時代を予見した。ヨエルはそれが「悪の大きい」時代であることを知った。彼は民の状態をこう記した。「群衆また群衆は，さばき（決心）の谷におる。主の日がさばき（決心）の谷に近いからである」（ヨエル　3：14）

ヨエルの予言は確かに成就しつつある。なぜなら，我々は「決心の谷」にいるからである。現代のチャレンジは，「世の道」と「主の道」の間をフラフラと流されることなく，確固としていることを求める。主は，自らを一貫して主につき従う人々を必要としておられる。主に従うには，自らのすべてと勇気が要求される。実に主は言われた。「わたしの味方でない者は，わたしに反対するものであり，」（マタイ12：30）カイン，ユダ，レーマンらを考える時，この言葉の真実なことがわかる。彼らはみな主の道をよく知っていた。しかしそれぞれに「決心の谷」に立った時，彼らは主につき従って行くことができなかった。

一方，正義を行なうことは偉大さと表裏一体をなす。最初にすべてを捧げて正しいことを行なおうと決心せずに，満足と成功を得られる人はいない。

末日聖徒イエス・キリスト教会において，主は我々に，常に変わらず福音の真理によって生きることを求めておられる。真の意味で，パートタイムの聖徒であることは正に不可能である。教会の若人たち，みなさんは自分の働きをごまかしたり両親を軽んじてはならない。タバコや酒を飲んだり不道徳に走ったり，不正直というような悪いと知っていることを行ないながら，教会の責任を誇りと尊厳をもって遂行することはできない。それは偽善である。

聖典を読むと，主が，自らの信じるところに全てをもって従う人々をお選びになり，彼らを喜ばれたことがわかる。その最も顕著な例は，主がタルソのサウロを召されたことの中に見出せる。

サウロは信念によって動く人であった。何かが正しいと信じると，すべてを捧げて信念に生きた。異端と信じたクリスチャンを迫害している時も，サウロは自分の正しいと思うことに何の疑いも抱かなかった。その非常な熱心さは，使徒行伝の著者がこのように強い調子で述べるほどであった。「さてサウロは，なおも主の弟子たちに対する脅迫，殺害の息をはずませながら……，」（使徒9：1）

サウロが悪いことに身を捧げていたにもかかわらず，もしサウロが真実なことに献身するならばそれと同じように熱心になるだろうということを主は知っておられた。サウロがクリスチャンを追ってダマスコへ行く途中，主の御声が聞こえた「『サウロ，サウロ，な

ぜわたしを迫害するのか』と呼びかける声を聞いた。そこで彼は『主よ，あなたはどなたですか』と尋ねた。すると答えがあった。『わたしは，あなたが迫害しているイエスである。あなたはとげをけることはできない』サウロはためらわず尋ねた。『主よ，私に何をお望みですか』」（使徒９：４～６英文）サウロはすぐさま決心した。残りの全生涯がそのことの証詞である。

福音に対する献身はサウロを偉大な宣教師にした。テモテに書いた次の言葉は，彼の非常な献身を表わしている。「というのは，神がわたしたちに下さったのは，臆する霊ではなく，力と愛と慎しみとの霊なのである。だから，あなたは，わたしたちの主のあかしをすることや，わたしが主の囚人であることを決して恥ずかしく思ってはならない。むしろ，神の力にささえられて，福音のために，わたしと苦しみを共にしてほしい」（Ⅱテモテ１：７～８）

今日の世は，「臆する霊ではなく，力と愛と慎しみとの霊」をもって真理に自らを捧げる人々を捜している。

主がサウロを召されたことは，自らを捧げて，自分の行なった決心に忠実である男女を主がいかに望んでおりたもうかを示している。すべてを捧げて従うのが必要なことは黙示録にも言われている。「わたしはあなたのわざを知っている。あなたは冷たくもなく，熱くもない。むしろ，冷たいか熱いかであってほしい。……あなたを口から吐き出そう」。（黙示３：15，16）

人はどのようにして，生きた福音にすべてを捧げられるであろう。教会の教えることを知っているだけで充分であろうか。教会が真だと信じることは，ゆるぎない献身の基であろうか。あるいは他にもっと必要なものがあるのだろうか。

主の使徒であったシモン・ペテロの働きの中に，それらの質問の答えを教えられる。ペテロは主を身近に知っていた。三年間主のみそばに接していた。ペテロは真の主人とは誰れかを知って，自らの信仰を公に表わした。しかしペテロはささいなことで主を否んだ。主が十字架にかけられた後，ペテロは我を忘れ，ろうばいして，「わたしは漁に行くのだ」と言った。（ヨハネ　21：３）

それはペテロが聖霊の証詞を得るまでのことであって，それ以後は，主の御業に全てを捧げようと決心し，統治者の家，町なか，牢獄などあらゆるところで勇気をもってイエス・キリストのことを宣べ伝えた。全身全霊をこめた彼の働きはペンテコステの時と，それ以後の業に明らかである。

我々にとっても同じことである。我々は，福音の神聖さについて聖霊の証詞を得て，その後意識してイエス・キリストの福音の原則に生きることを決心しなくてはならない。後者が大切である。献身は，自動的にそれだけが急に現われるようなものではない。意識して努力することによってのみ，全身全霊を主に向けることができる。サウロのように我々も問わねばならない。「主よ，私に何をお望みですか」そしてその後，主の御意を実践しなくてはならない。

正しいことを行なう，と人々の前で宣言した若人の実際の行動は，信じていることへの献身をそのままあらわす。

福音に自らすべてを捧げることは，必ずしも簡単なことではない。しかしあなたも私もそうすることなくしては，神の王国で大いなる者とはなれない。今「決心の谷」に立っている我々は，ヨシュアのように断固としてこう言わねばならない。「……ただし，わたしとわたしの家とは共に主に仕えます」（ヨシュア　24：15）

クリスマスの子羊

エレイン M. ミューレイ

キムが美術館のクリスマスルームを訪れた日に，彼がキムであると思った人はいなかったでしょう。髪をとかし，きれいな洋服を着てもこの日だけは不平を言わない日でした。自然と耳の後を洗い爪の間もきれいにしたのです。そのキムが，やさしい音楽の流れる平安の満ちた美しい部屋に入って行った時，彼に気がついた人はいなかったでしょう。キムの目はいつも輝いていましたが，クリスマスルームを訪れた今日，その目には新しい輝きがありました。小川がさらさらと石をこえて流れるようないつもの輝きと違って，陽の聖らかな光で霜をおいた冷たく深い山の池の輝きに似ていました。その部屋に飾られた一つ一つの絵を見ると，深い愛の気持がわいてきました。

この部屋は毎年クリスマスの季節にだけ公開されるのでした。中の絵はよく描かれているだけでなく，みな最高のものでした。単に絵のテクニックが素晴らしいということでなく見て美しい上に心を感動させる絵でした。それを見る人はなんと素晴らしい絵だろう！　描いた人が目に見えるようだ」と，一歩しりぞいてながめるかわりに，もっと近づいてこうつぶやくのでした。「キリストがお生まれになった初めてのクリスマスの時に，そこにいたかったなあ，イエス様にお会いできたらよかったのに。」多くの絵が飾ってありましたが，数点が特に選ばれて，毎年一つ新しい作品がこのクリスマスルームにかけられるのがいつものことでした。

キムは部屋の中央の椅子に静かに座って，一つ一つの絵が何を言わんとしているかを心をこめて見てゆきました。ゆっくりと心静かに。朝のうちは見学者が少ないのでこの時間を選んだのです。この日はもう一人見学者がいました。キムはみなれた古い絵を先に見て新しい一枚の絵は最後に残しておきました。それぞれの絵から感銘を受けたのですが，特に最後の絵は彼を釘づけにしました。その絵はなぜ他の絵と違っていたのでしょうか。キムは前にその絵を見たことがあるような気がしました。けれどもそんなはずはありません。新しい作品なのです。他のところで見たはずもありません。彼は近づいてよく見ました。それは馬小屋で動物がそばにいる聖家族の絵で，とりたてて変わったものではありませんでした。赤児のキリストのそばに羊飼いが膝まずいたり，立ったりしていました。空には新しい星が輝き，ゆりかごと中に眠る幼な児を照らしていました。入口のそばにいる小さな羊飼いはまだとても若いようでした。彼はやわらかく真白な羊を抱きしめて顔を羊の毛にうずめていました。小さな羊飼いの目は驚きと愛に満ちていました。こう言っているように見えたのです。「この方が成長して世の救い主，我々の王となる赤ちゃんなんだ。」

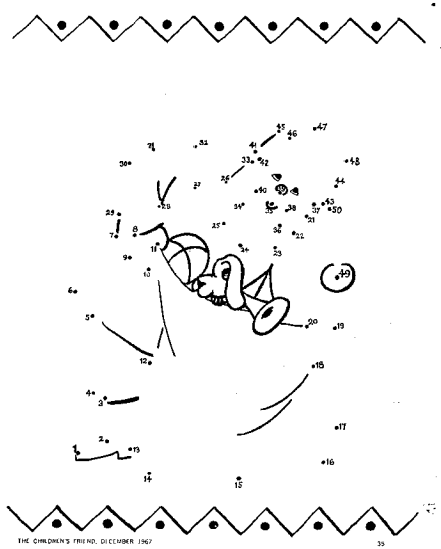
その羊飼いの少年には何かひきつける所があって，キムは近くへよりました。彼は小さな羊飼いの心を読みとるように，その目をじっとみつめました。その少年の目には何があったのでしょう？　キムが羊をなでるくらいに近よった時，誰れかの手がキムの肘をおさえました。彼はギクッとして，

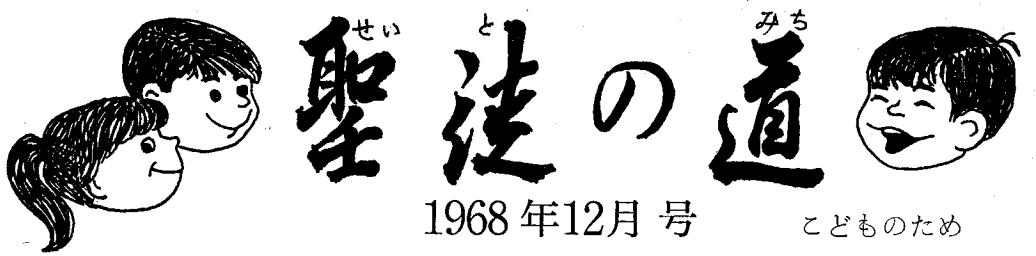
あれを見てみましょうよ」と息をついて「今までに，あんなに美しい物を見た事があって？」と言いました。お姉さんが，暖炉の方を見つめているので，弟のパットは，暖炉の上にのっている帆船の模型の事を言っているのだろうと思って「ヤー，確かにすごいや，僕もあんなのが欲しいなあ」と言いました。「私の言っているのはあれよ」とパムが叫びました。彼女は，暖炉の上にかかっている，金の額に入っている一枚の絵をさしました。それは羽を広げている豪華な青いちょうちょの絵でした。ダニーは自分がどうして，前にそれに気がつかなかったんだろうと不思議でした。本当にそれは部屋の中で一番目立つ物でした。「アルブライト氏はきっとちょうちょが好きだったんですね，ちょうちょの絵さえ集めていたんですからね」とダニーが言いました。「きれいですね」とベントン氏も云いました」しかし，マックス，いや，アルブライト氏はあの絵を買ったんじゃなくて，自分で画いたんですよ，不思議な事ですよ。もし彼が本気になってやったら，本当に天才的な芸術家になれたでしょうね。しかしごぞんじのように，あれが彼が画いたたった一つの絵なんですよ」「彼はきっと，絵を書いたり，ちょうちょや，あんながらくたを集めたりして，きっと変りものだったんですね」とパットが言いました。「あんなに，すてきな絵はないわ」とパムがため息をつきました。「ねえ，あれもすてきだけど，僕らはまだ仕事があるんだよ。まだ，誰がモルフォかしらべなければ」とパットがあわてて言いました。彼はベントン氏の方を心配そうに見て「本当に，モルフォ氏について何も聞いていませんか？」とききました。ベントン氏は首をふって「私はどうも，お手伝いが出来ませんで，マックスが刑務所へ行く前の事なら良く知っているんですが。もちろん，私は彼が正直な男だったとは思いませんでしたし，モルフォなんて名前も聞いた事がないですよ」と言いました。「それじゃ，僕達は本当に困まっちゃうなあ」とパットは，むっとして，ぶつぶつ言いました。「誰もこの，おいぼれモルフォについて聞いたことがないんじゃ，その名前の人を見つける事も出来ないね。一体，誰の事で，どこにいるのかなあ」とパットは腹立たしそうな声で言いました。しかし誰も，それについて答えませんでした。謎につつまれたモルフォの正体と，行くえは，本当に大きな謎でした。

（つづく）

クリスマス，イヴがくるまえに

このてんをむすんで，できたえに，いろをぬりましょう。





クリスマスのおともだち

ミルドレッド・グレニャー

これは，オランダのおはなしです。こおりのはったうんがをスケートで，手をつないで，わったて行きながら，カトリーナとヒルダは，うれしそうに，にっこりと笑いました。

カトリーナはかたほうの手に，明かるい赤の毛糸で出来ている手ぶくろをもっていました。それは，カトリーナが学校がおわってから，ヒルダの家で，あみ終わったばかりのものです。ヒルダも，いっしょにあんだばかりの，かわいい赤のぼうしを持っていました。「あした，この手ぶくろをもらったら，ジュリアンナはよろこんでくれるかしら？」とカトリーナはききました。「もちろんよ，だけど，ジュリアンナはこの赤い帽子の組み合せを気にいるかしら？ねえ，カトリーナ，あした学校で，おくり物をこうかんするのがとっても待ちどうしいわ。ジュリアンナは私たちをとくべつなお友だちに，えらんでくれるでしょうね。」あすは12月5日でした。その日は，オランダでは，だれもが，サンタ・クロースのたんじょうびをいわうのです。学校のじゅぎょうが終わると，生徒たちは，プレゼント

をこうかんしあい，それから，楽しい夜のために急いで家に帰ります。夕食がすむと大きな白い馬にのって来るというサンタ・クロースの来る用意をします。サンタ・クロースには，ちゅうじつなおとものブラック・ピーターがついています。サンタ・クロースはよいこどもたちにはプレゼントをおいて行ってくれるけど，いたずらで，言うことを聞かない子たちはブラック・ピーターにむちでうたれるのです。その２人の女の子たちが，スケートをしながら，うんがのまがりかどに来たときに，うんがのそばの小さな家に，だれかが入って行くのが見えました。

そして，小さなあかりが，われ目のあるまどから光っているのが見えました。ひびの入ったえんとつからは，かすかにけむりが，うずまいてのぼっていました。「だれが入っていったのかしら？」とカトリーナがききました。ちょうどその時，カトリーナや，ヒルダと同じくらいの年の女の子が，その小さな家の角口に出て来ました。女の子の着ている青いうわぎは，ちょっとみじかすぎるようでした。そして，ぼうしをかぶっていないので，黄色いふわふわしたかみの毛が風にふかれて，かおにかかっていました。その子は，カトリーナとヒルダを見ると，くるりと後を向いて家の後へ走って行きました。カトリーナは，悲しそうに，頭をふって「あんな小さな家にすむのはいやだわ，でもあの子はだれかしら？」といいました。そうしているうちに，二人は，カトリーナの家へつきました。そこには大きなまどと，新しい赤いやね，白いかきねにかこまれたきれいな庭がありました。２人はへやにつうじている。ピンクのれんが道をとおって，家をよごさないように，げんかんで，スケートぐつをぬぎました。カトリーナのお父さんのカール・バン・グレックはだんろにまきをいれながら「ちょうどまにあったね」といいました。カトリーナの「お母さんは，その日，しみ一つないように，ゆかをみがいたので，へやじゅう，せっけんと水のいいにおいでいっぱいでした。テーブルの上にえいようのあるこい豆のスープのはいっているおわんをおきながら，カトリーナのお母さんの，バラ色のかおはにっこりとほほえみました。うすく切ったチーズやパンやケーキもありました。おなかのすいた女の子たちには，どんなにかおいしかったことでしょう。２人はお皿を洗ってふきピカピカ光るガラスの戸のついているきれいな戸だなへしまう手伝いをしました。それから２人は，カトリーナのお母さんに，手ぶくろとぼうしを見せました。「とてもかわいらしいこと」お母さんは言いました。「じょうずにあめるようになったわね。だれにあげるつもりなの？」「ジュリアンナよ。ヒルダもこのぼうしをジュリアンナにあげるの。ジュリアンナが私たちのとくべつなお友だちになってくれたらすてきだわ」とカトリーナはいいました。「どうして，ジュリアンナに２つもプレゼントをあげるの？」とカトリーナのお母さんはききました。「だって，ジュリアンナは学校中で一ばんかわいい子ですもの。みんな，とくべつなお友だちになりたがっているわ。ジュリアンナはね，うんがの上の方の大きな家に住んでいるのよ。お父さんはたくさんの風車をもっているし，黒や，白の牛もたくさんかっているのよ。それにジュリアンナは，沢山すてきな洋服をもっているわ。」とヒルダが答えました。カトリーナのお母さんはいいました「だけど，ジュリアンナは，あなたたちのおくり物がひつようかしら？　私は，だれかほかの，あまり物をもっていない人に，おくり物をした方がよいと思うわ。」ねる時になって，カトリーナのお母さんはかべについているひき戸をあけました。戸の後ろには，たなのように見える２つのベッドがありました。２人の女の子たちがねると

ルフォに関する事をみつけ出そう」とパットが云いました。３人は調査を進めるために，３人だけで家に入りたいと思いました。彼らが家の中に入るか入らないうちに，ベントン氏も入って来ました。彼は部屋から部屋と３人について来ました。彼のために，３人はいらいらして来ました。そして彼が自分の家に帰るように願うのでした。「ここには，何をかけていたんだろう？」とパットがすばやく耳うちをしました。ダニーは肩をすくめて「彼は，僕達が何も盗まないかどうか確かめたいんだよ」「きっと，私達が本当に忙しくて，彼を無視すれば彼きっと帰るわよ」とパムが提案をしました。しかし効果はありませんでした。自動車屋はあいかわらず，何も言わずにかんししながら，うろうろし続けていました。ついに彼は「君達は何も見つからないと思いますよ」と言いました。パットは彼をみつめました。「手がかりですよ。私のいうのは」とベントン氏は言いました「君達は，博物館の盗難事件を解決しようとしているんだろう？」パットは，びっくりして物が言えず，ただうなづくだけでした。同じように驚ろいて，ダニーは「ベントンさん，何んで私達がこの事件を調べているのがわかったのですか？」と聞きました。「誰かは私に知らせてくれるものですよ」と答えました。なぜですか？　ひみつにしようという事だったんですか？」ダニーは，ゆっくり首をふって「いいえ，ベントンさんそういう事ではないと思います。あなたは，アルブライト氏をごぞんじですね。」とダニーが言いました。ベントンはうなづいて「もちろんですよ。私達は隣り同志でしたからね」と言いました。彼は，今までに，モルフォという様な名前の人について話した事がありましたか？」とダニーは次の質問をしました。自動車商は首を振って「私には言わなかったなあ，モルフォなんて。ずい分変わった名前ですね。いや，まてよ，前に一度その名前を聞いた事がある様な気がする。ところでそのモルフォという人がこの事件とどういう関係があるんですか？「私達は，彼がアルブライト氏のひみつのきょうはんしゃだと思うんです」とパムがあいづちをうちながら言いました。「ほんとうですか？」ベントン氏はほとんど言葉をつまらせて，口をすぼめ，考えこみました。「私達はこの家で，彼について何か見つかると思っているんです」とパットが言いたしました。再び，ベントン氏は首をふり「私は見つからないと思いますよ」警察がマックスのあの不幸な事件の時に，ここにやって来て，かなり捜査をして行きましたからね」子供達は，家の中に入った時からづっと仕事を続けていたので，最後の部屋の方へやって来ました。その部屋も窓をそうじする必要がありました。「マックスの書斎です」戸びらをあけながら。ベントン氏は言いました「ここは，彼のお気にいりの部屋だったんですよ」書斎は，とても大きく，正方形で，豪華に飾りつけてありました。入口から，のぞきこみながら，３人は右の方に暖炉がみえました。暖炉の上には飾り時計が置いてあって，その両側に磁器の花びんが並んでいました。暖炉の片方のはしには飾り用の帆船の模型がのっていて，もう一方には，古い英国のつので出来た酒入れがありました。部屋のほぼ中央に，大きなマホガニー製の机がありました。大きな，いかにも楽そうな皮ばりの一組の椅子や，足台，小さなテーブルやランプ，びようぶ，といったような物がありました。ほとんど全部の壁という壁は，きれいに製本された何百冊という本の並んでいる本棚でおおわれていました。小さな片すみに，背の高い金属製のファイル用のキャビネットが置いてありました。「しかし，パムには，その部屋全部の中で，手がかりになる物は一つしかなく，他はとるに足らぬ物のように思えました。「ねえ，

車で行ったんだが，同じ事を思ったよ」とお父さんは答えました。「月曜日に，あの家を管理する人を行かせようと思っているんだ」「私達なら，今日出来るわよ」とパムがていあんしました。「私達は仕事をちゃんとするわよ，それにお金も欲しいところなの」パターソン氏は少しの間，考えこんでいました。「ところでと，窓はきれいにしなければ…。それに家具のほこりもはらわなければならないなあ」パムは急いで，自分が考えた事はきっとそんじゃないだろうとつけたしました。「余分なお金は要求しないわよ」「よろしい」とパターソン氏はしょうちしました。しかし，私は，君達がまじめに働いているか確かめに，ふいにあの家へよるつもりだ」「お父さん，ちゃんと仕事を続ける事をちかうわ」とパムが言いました。「よろしい。パムや，私はお前にこの責任を与えることにしよう」とパターソン氏は言って，少年達の方へ向きました。「それから，君達２人の男共は彼女の言った様にするね。しょうちかい？」少年達はうなづきました。パットは「それじゃお父さん，僕達に鍵をかしてくれますか？」「鍵はいらないよ」という答えが返ってきました。「ベントン氏が隣りに住んでいて，火事や他の非常時のために鍵をもっているからね。彼がきっと君達を家の中に入れてくれるだろうよ。君達が行く間に，彼に電話をしておくからね」「ベントン氏…あの自動車商のですか？」とダニーが深く考えこみました。パターソン氏はうなづいて「そうだよ，ダニー君。いい人だよ。非常に協力的でね，隣人のよしみで，私の代りにあそこを管理する事を申し出てくれてね」ダニーはベントン氏を知っていました。ほとんどの子供達は彼を知っていました。ハーヴィー・ベントンは自動車販売業をやっている人でした。しかし新品や中古のオートバイや自転車も売っていました。大ていの子供達が彼から自転車を買っていました。そして，その自転車がダメになったり，修理の点検に出したりする必要がある時になると彼の修理屋に皆，自転車を出しました。アルブライト氏の家は街のはずれにあって，中くらいの規模で，古い英国式に灰色の石で建てられていました。「あれが，アルブライト氏の家だわね，とすると，となりのあの家がベントン氏の家にちがいないわねきっと」と灰色の石を指さしながらパムが言いました。一人の男の人が，おもての方に出ていて，しばふに水をまいていました。若者達が近くまで，自転車をのりつけると，自動車商とわかりました」彼はにっこり笑ってあいさつをしました。自転車のハンドルにかかって，がんがん音を立てているバケツや，パムのバケツに入っているぞう巾や，窓のそうじ道具を見ながら，ベントン氏は「あなた達がそうじ班でしょう」。

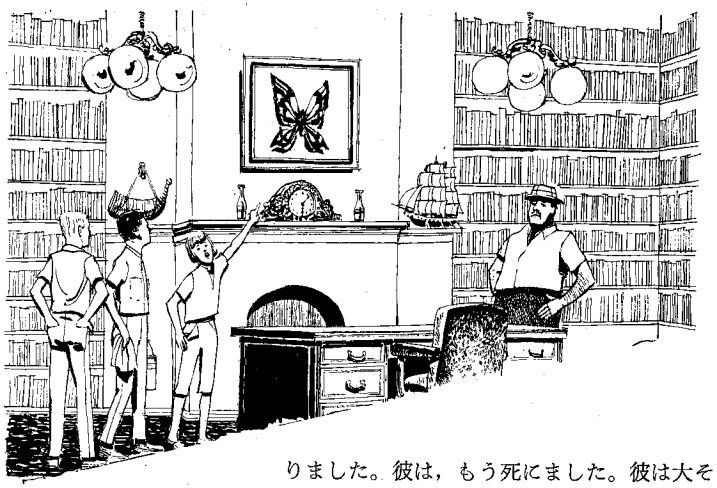
パターソンさんが２～３分前に私のところに電話をかけて来ましてね」ベントン氏は再び，ホースをとり上げて「もしいる物があったら，言って下さい」とつけ加えました。「水以外なら全部必要な物を持っていますので…」とパムが言いました。「あそこでは，全部が止められているんです。暖房も，電気水道，全部なんです。ですから水はうちの方からさし上げましょう」とベントン氏は家の所でうなづきました。子供たちは時間をムダにしないで，バケツに水を一杯入れると，窓の高い部分をふくために，きゃたつをかりて，仕事にとりかかりました。「まず，外から始めましょう」とパムが決めました。１時間以上も少々きつい仕事をやりとげると，窓の外の仕事は終りました。しかし，彼らの努力にもかかわらず，あまりきれいになったとは思えませんでした。窓ガラスはまだきたなく見えました。パムはがっかりして，まゆをしかめました「きたないのは，ほとんどが中の方なのね」「よし，中へ入ろう，そしてモ

ころでした。ベッドに入ってから，２人はカトリーナのお母さんのいった事について話しあいました。サンタ・クロースがやって来る〃　あすのばんお母さんは，夕食の後で，床にきれいな白いシーツをひろげておくことでしょう。ぼうしをかぶり，白いふちどりをした赤いようふくをきて，白いあごひげの背の高い男の人と言われているサンタ・クロースが，どの子がその年の間よい子だったかをきめると，その白いシーツの上に，おかしや木の実，おいしいケーキの雨をふらせます。そうしてサンタ・クロースは帰っていくのです。子供たちはねる前に，じぶんたちのくつをきれいにみがいてだんろの前においておきます。そうすると，子供たちがねているうちに，サンタ・クロースがもう一ど来て，くつにおもちゃや，おくりものを一ぱい入れておくのです。なんてすばらしい夜なんでしょう〃　つぎの朝，ヒルダとカトリーナは，学校に行くとちゅうで，もう一どあの小さな家の前をとおりました。同じ，色のあせた青いうわぎをきた小さな女の子が，またにわに出ていました。その子はとてもかなしそうでした。じぶんを見ている２人の少女をみると，女の子は走り出して，家の中へ，はいろうとしました。

「こんにちわ〃　今日は学校へ行くの？」とカトリーナは女の子に話しかけました。いいえ，弟が生まれたばかりなの，だからお母さんは，きょう，いっしょについて来て，学校に行く道をおしえられないの。」と女の子はこたえました。ヒルダとカトリーナは，小さなドアの取っ手を見ましたが，ほんとうに，そこには赤いまりがかかっていました。オランダでは，家に男の赤ちゃんが生まれると，ドアのとっ手に赤いまりをかけるのです。もしそれがピンクのまりだったら，生まれた赤ちゃんは女の子なのです。「もしお母さんがいいといったら，私たちといっしょなら行けるし，そうすれば道をおしえてあげられるわ」とヒルダがいいました。「だけどきょうはとても，さむいわ。それに私，かぶるぼうしがないの。きっと，サンタ・クロースがこんばん，ぼうしをおいていってくれると思うの」とその小さな女の子は言いました。２人の女の子たちは，かおを見あわせてから，うれしそうにわらい，うなづきあいました。２人はこわれたもんをあけて，にわに入って行きました。「あなたはもうぼうしを持っているわよ，だって，私たちがあたらしいのをもって来てあげたんですもの，それに，そのぼうしによくにあうかわいい手ぶくろももって来たのよ。きょうはサンタ・クロースの日だからよ」とカトリーナはいいました。小さな女の子は，手におくり物をもって，うれしそうにわらうと，青いめがきらきらと光り，ほほにえくぼができました。「これほんとうに私のなの？……ほんとうにどうもありがとう，ありがとう。女の子はさけびました。カトリーナはなんてかわいい子だろうと思いました。その子がかなしそうなかおをしていない時は，ジュリアンナとおなじぐらいかわいい女の子なのです。「みんな，あなたにあげるのよ」とカトリーナは女の子にいいました。「手ぶくろをはめて，ぼうしをかぶって，お母さんに，きょうは私たちと一しょに学校に行ってもいいかどうかきいてごらんなさい。おべんとうをたくさんもってきたので，あなたのぶんもあるわ」「あたらしいお友だちができたわね。この女の子をよろこばせることをたくさんかんがえましょうよ。」カトリーナはヒルダにいいました。「あの子を『クリスマスのお友だち』とよびましょうよ，このようなお友だちが見つかってよかったわね，今までで一ばんたのしいクリスマスになるわよ〃」

モルフォとはだれか？

ちょうちょどろぼのひみつ



ミューレィ・T・プリングル作
チャールズ・キルター絵

これまでのあらすじ

ダニー・コリンズは，夏の間ブリクストン博物館でのアルバイトをみつけました—それは，ちょうちょの採集品の荷を解いたり，はく製の準備をしたりする仕事でした。木曜日に仕事を始める前に，彼は，パム・パターソンからブリクストン博物館が盗難にあったことを聞きました。パムと彼女の弟のパットをつれて，ダニーは，警官がたくさんいて，大さわぎになっている博物館へ急ぎました。ちょうちょだけが盗まれていました。それは，アルブライトの収集品でした。いったいどんなどろぼうなのでしょうか？　ダニーと彼の友達は，この謎を解く手伝いをすることに決めました。新聞社で，彼らは，マックスウェル・アルブライトが脱税(だつぜい)で有罪となり，５年のきんこに処せられた事を知りました。彼は，もう死にました。彼は大そう悪い事をしました。これが，彼らにとって，最初の手がかりでした。

第三章

一つ一つの言葉をていねいに読みながら，若い三人のそうさはんは，死んだマックスウェル・アルブライトについての５つの新聞の切りぬきを調べていました。記事によると，彼はたくさんの不法行為をしていたけれど，とても立ちまわりがうまいために，所得税をごまかそうとして失敗するまでは，法律も彼を取りしまる事ができませんでした。彼はその犯罪のために有罪と決まり，５年間ろうやに入れられました。警察は彼の犯したたくさんの犯罪のかげには，ひみつの共犯者がいたにちがいないと確信していました。しかし，マックスウェル・アルブライトは，共犯者がいた事を認めるのを，いつも拒み続けていました。アルブライトは，うまく，不正にばく大な金をもうけました。政府は，まだはらっていない税金の代りに，そのばく大な財産の大部分を要求しました。しかし，不正な財産をみつける事はできませんでしたし，ひこくはそれについて話すのもこばみました。子供達は，５番目の最後の記事の切りぬきのところへ来ました。それは，約１年も前のもので，日付は７月８日となっていました。そして見出しには「ぜんか者ついらくして死ぬ」と出ていました。その記事には，アルブライトの家から助けを求めるかぼそい叫び声が聞えて，その声をきいて近所の人々が彼の家へ来た時には，彼が急な階段の下で，ひん死の重傷を負ってたおれているのが発見されました。彼は急いで病院に運ばれましたが，次の朝，病院で死にました。死ぬ前に，アルブライトは，警察に何かを云おうとしました。「事故じゃないんだ」彼は苦しそうにつぶやきました。「あいつがやったんだ……金だ…30万ドルだ」彼の声は，しだいに弱まり，ささやきになっていきました「モルフォがもっている——しかし彼は言い始めたことを言い終えないうちに死にました。新聞の記事は「調査は続行中である」という文章で結んでありました。ダニーと，パット・パムは互いに顔を見つめあいました。「モルフォ」彼らは声をそろえて言いました。

「彼がひみつのきょうはんしゃにちがいない」

モルフォとは誰か？

「そうだ」パットは息をついて「彼がお金を持っているんだ，30万ドルだ」と続けました。「アルブライト氏はモルフォがお金を持っているとは言わなかったわ」とパムが反対意見を出しました。「彼は言いたいことを言わないうちに死んだんですもの」「そこだよ，彼が言おうとしていたのは」弟のパットが言い返しました。「ほかに何か？彼が階段から落ちたんじゃなかったという点についてはどうだろうか，彼は自分のあいぼうがやったといっていたけど」声をひそめて，ドラマの時のような話し方で，パットは続けました「アルブライト氏は殺されたんだ。僕はモルフォをみつけたいとは思わないよ。悪漢と殺人者達だもの彼らが何んでちょうちょと関係あるんだい？」「僕が知りたいのはそこなんだよ」とダニーが最後にはっきり言いました。「ちょうちょとこれと何の関係があるんだろう？」「モルフォが知っているのよ，そして，私達が彼をみつけ出すのよ」とパムが言いはりました。しかし図書係りにきくと，彼女はファトルキャビネットをしらべてから，首をふりながらもどって来て「申し訳ないんですが，うちのファイルにはモルフォに関する資料は全然ないんですよ」と言いました。３人は考えこみながら新聞社のビルから出て来ました。僕は，アルブライトの家にはいれたらと思うんだけど」とダニーが言いました。「手がかりになる事がきっとあの家にあるに違いないよ」「できると思うよ」とパットが答えました。「うちのお父さんはアルブライト氏の家の鍵を持っているからね，彼の家もうちのお父さんの会社の名簿に名前がのっているんだから」「そりゃあ，いい!!」とダニーが叫びました。「君達のお父さんが不動産業をやっていたのを忘れていたよ，彼が許してくれるかなあ？」「彼が言うことを私がかわりに今言えるわよ」とパムがさえぎって，「絶対にダメだ!!　これがお父さんの言う事よ。私はお父さんを責められないわ」「ねえ？どっちの味方なのかい君は？」とダニーが聞きました。しかし，パムの言う通りでした。パットはお父さんにアルブライト氏の家の鍵をかしてくれるようにたのみました。そして，その理由をきいてから，パターソン氏は首を横にふりました。「絶対にダメだ!!」パット，お前はもっと良い事を知りたがりなさい」とお父さんは言いました。ついに，パムが言いました「お父さん，私気がついたんだけど，アルブライト氏の家の窓がおそろしくよごれているわ。あんなに外から見てきたない家は，どのお客さんも，買ったり，かりたりしないわよ」「きのう，私もこのそばまで

その人の顔を見あげました。それは若い男の人でした。

「でも，でも……ほら……これ……」キムはあえぎあえぎどもりながら，顔を赤らめて言いました。「この羊飼いの子……ぼくみたいだ」男の人は絵とキムを見比べました。

「そうだね。その絵の人たちは君や私のようだ」

「この男の子はイエスさまに羊をあげたのかしら？　あんなにしっかり羊を抱いているよ。イエスさまにあげたのかしら？　ぼくもそこにいられたら良かったのになあ。きっとイエスさまに羊をあげたのに……」

「あげることはできるよ」

「でもぼく羊を持っていないし，目を閉じたり絵を見たりする時しかイエスさまに会えないんだよ。」

「君はイエスさまに誕生日の贈物をすることができるよ。」

お母さんが，入口のところへ来てキムを呼びました。キムは，男の人と絵とお母さんを見て，どうしようかと迷いました。お母さんは急いでいらっしゃいといっています。

家へ帰る途中ずっと，特に羊を抱いた羊飼いの子の絵と，男の人の声と言葉が，キムの頭から去りませんでした。それからの毎日もいつもそのことを考えていました。クリスマスツリーを飾っている時も，お菓子を作っている時もお使いに行ったり贈物を包んだりしている時も，そのことを忘れようとしましたが，どうしてもだめでした。キムはだんだん気持がへんになってきました。

最後の贈物を包んでツリーの下においた時，キムの心はもう爆発しそうになって叫びました。「でも，ぼく，イエスさまにあげるプレゼントはもっていないんだよ！」

お母さんが驚いて聞きました。「なんですか？」

「あのね，イエスさまのお誕生日のこと，ぼくたちはみんなにプレゼントがあるけれど，……いっぱいのプレゼントをするし，いっぱいのプレゼントをもらうけれど……でも……クリスマスはぼくたちの誕生日じゃないでしょう。イエスさまのお誕生日なのに，ぼくイエスさまにあげるプレゼントを持ってないよ。持っていたら，どうやってあげたらいいの？　クリスマスルームにいた男の人はあげられるって言ったけど，ぼくあげられないよ。どうしていいかわからない。」

キムは泣きだしそうでした。お母さんは，床に落ちたツリーの飾り物をひろって，キムの肩に手をかけ，もう片方の手でキムの顔をあげながら，涙のあふれたキムの目をみつめました。いつものキムのようではありませんでした。

キムはお母さんに，自分にとてもよく似ている羊飼いの少年と，羊と，美術館で話をした男の人について話しました。

「キム，イエスさまに何が欲しいですかってたずねるとしたら，キムは何をすることができ，イエスさまがどうお答えになるか，わかりますか。」「ううん，わからないよ。」

「こうおっしゃるわよ。『あなたがたによく言っておく。わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは，すなわち，わたしにしたのである』。キムは，イエスさまのところへ来て，どうしたらしあわせになれますかとたずねたお金持の人の話をおぼえているかしら？イエスさまは，しあわせになるためには，持ち物を全部売って貧しい人たちやそれが必要な人たちに施こしなさいって答えられたのよ。そのお金持の若者はできなかったの。あなたにはできる？」

「かわいそうな人たちを助けてあげられる位にいっぱいの持ち物は持っていないもの。それに，困まっている人を，ぼくは知らないよ。』

「人々はいろんなことで貧しくなるのよ。ある人たちは心が満たされないの」しばらく間をおいてこう続けました。「あまり元気でない人を，キムは知っている？」

「グルーチ・ジェイクさん。ジェイクさんはぼくがあの人の古い花を見てるだけでぶつぶつ文句を言うの。」

「ジェイクさん，，自分でお作りになった花をとても注意してよく育てていらしたのね。ジェイクさんは花がすべてなのよ。ご家族もよいお友だちもいらっしゃらないのだから……」お母さんはしばらく黙ってから，ややためらいがちに言いました。「キム，あなたはクリスマスプレゼントに何が欲しい？」「ラジオだよ」「ラジオはクリスマスツリーのかげに，青い紙に赤いリボンで包んでありますよ」「わあ，お母さん，ほんと！」「グルーチ・ジェイクさんはラジオを持っていらっしゃらないわね」「でも，ぼく……」

「あなたは羊飼いの少年が羊をとても大切にしてたことを知っているでしょう。その男の子は羊をイエスさまにあげたと思う？　それについて考えてごらんなさい」お母さんはキムの目をじっとみつめて抱きしめてから，立ち去りました。

キムは目をつむって，羊に顔をうずめていた羊飼いの顔を思いました。とてもしっかりと羊を抱いていたことや，クリスマスルームで会った男の人に言った自分の言葉を考えました。「ぼくもそこにいられたら良かったのになあ。きっとイエスさまに羊をあげたのに」。そして，グルーチ・ジェイクさんのことと，ジェイクさんがいつも子供たちが庭の近くへ来るだけでも文句を言うことを考えました。それから部屋へかけて行ってベットのわきに膝まずき，それまでしたことのないお祈りをしました。天のお父様に，御子のためにどんなプレゼントをしたら良いですかとたずねたのです。

その後，一日中キムの心は穏やかでした。次の日のクリスマスイヴもそうでした。夕食後のキムは黙ってテーブルからはなれ，そっとタンスの所へ行って上着をとりだしました。そして静かに歩いてクリスマスツリーの後へ行き，赤いリボンの青い包みを持って，そっと家を脱け出しました。

キムは長い間帰ってこなかったので，お母さんは少し心配になりました。しかしやがて楽しそうにスキップして帰ってくるキムの声がしました。石段を一とびしてドアをあけたキムはタンスに上着をかけながら，「お母さん，ジェイクさんって，とってもいい人だよ」と言いました。そしてお母さんの座っている椅子のひじに腰かけ目を輝かせて言いました。

「お母さん，最初のクリスマスの時に，ぼくがいたら，イエスさまに羊をあげていたよ！」

日　曜　学　校

すばらしい体験

ルシル・ネルソン・ジェンセン

日曜学校で子供達に楽しい時間を過させるには，どうしたらよいであろうか。子供達を楽しく過させるのは，先生の責任であり，小さな子供達に「教会はなんでも一番すてきなところ」と感じさせるのは，先生の指導態度と方法にかかっている。先生がどのように考え，何をするかということは，なんでも吸収しやすい年頃の子供にとって，非常に大切な問題なのである。

先生が子供達について知るべきこと

子供達も人間であり，大人と同じように，自尊心，親切心礼儀あるいは親しみなどが必要なのである。また子供はたいへん勘がいいので，先生が黙って，おだやかにしていれば，全て巧くいっているんだなと感じるが，先生がなんとなく気のりがしない風でいたりすると，子供達もそれを敏感に見てとって，先生の真似をしてしまうものである。先生が自分のクラスを楽しく興味あるものにすれば，子供達は，なぜ教会の勉強がそんなに大事なのだろうかと思って，先生の話を一生懸命に聴くであろう。

先生は，子供達が楽しい時間を持てるようにおぜん立てをする。先生は子供と一緒にいるのが楽しく，子供が大好きであり，子供を恐れたりするようなことは全くない。また子供を暖かくつつんであげる必要を感じ，そうしてあげる。先生は子供が何かよくないことを言ったりしたりしても，決してろうばいしてはならない。もし子供が先生に対して，不親切なことを言ったとしたら，それはたいていの場合，先生のたよりなさ，不愉快さ，心配性とか無関心などを指摘していることが多いのである。その時，先生がおだやかに，熱意をもって，偽りのない卒直な態度を示し，暖かい理解をもって，子供に話してやるとクラスの雰囲気を和らげることができる。

どのように子供をクラスに歓迎するか

先生が戸口で新しく入る子供に会うとする。その時先生はその小さな子供の背たけまで，自分の身体を低くしなければならない。ひざをついたり，腰をまげたりすることができなければ，椅子に座るとよい。子供とじかに目と目をあわせるといつた格好で接触することが必要である。先生は母親にではなく子供の方に注意を向けるべきである。子供を自分の「一番よい友達」だと思い，そのように子供達をあつかってあげると，子供はクラスを非常に楽しみにすることであろう。ではどのようにしたらよいのか。それは……まず親しみを卒直に表わすことである。いつも必ず微笑を忘れずに前向きの姿勢で，「こんにちは，私，山本姉妹です。あなたのお名前は」と呼びかけるならば，子供はきまってそれに答えるであろう。それから先生はこう言う。「マリちゃん，私，あなたの先生よ。今クラスでやってることをあなたにも聞いてもらいたいの。一度クラスに来てごらんなさい。」（もしこの先生がこれだけで終ってしまったら，せっかく得た子供との交わりをすぐにも失なってしまうにちがいない。）先生は子供の手を引いてクラスの部屋まで一緒に連れていってあげる。もし子供がそこでためらって，母親の手を引いたら，こう言ってあげるとよい。「お母さんは一緒に子供のクラスへ入りたいと言っているの？」（この時いつも親に話しかけるより，自主的であるべき子供に言った方がよい）。

子供の名札がおいてある机に連れていってどこに名札をつけて欲しいか尋ねなさい。（これで子供の気持をまぎらし，同時に先生はその子の名前を覚える）。

最初から先生は子供の名前を呼ぶことが大切である。それは子供に「先生はすばらしい人だ」と感じさせるものである。（子供は大人よりも早く人々の態度を判断するものである。もし先生が奇妙な変った子供だと考えているとしたら，子供も同様の反応を示すものである）。

子供に座りたい所をきき，じゅうたんか椅子の輪の中に座らせなさい。また名札をつけることは他の子供と話し合うよいきつかけとなる。

子供の学び方

子供も大人と同じように感覚を通して知識を得る。ヘレン・ケラーが水を知った時の話は，だれにも新しい知識を学んだ時の喜びを思い出させてくれる。ヘレンの教師サリバンは手のひらに何度も字を書いて，水というものを覚えこませようとしていた。しかしヘレンはどうしても理解できなかった。ヘレンは自分の経験をこう話している。

「私たちはすいかづらの香りの漂う道を，家に向っていました……だれかが水を飲んでいました。すると先生は私の手を蛇口のところへ持ってゆきました。冷たい流れが手の中にほとばしり出た時，先生はもう一方の手に，『水』という言葉を書きました。……突然，私は何か忘れていたようなぼんやりした意識を感じました……そしてどういうわけか，言葉の秘密が私に伝わって来ました。私はその時に水とは，手に流れて来たすばらしく冷たい何かだとわかりました。」

ヘレン・ケラーは，五感のうち二つが使えなかったけれども，学ぶことの喜びを経験できた。

日曜学校での最初の体験により，未知の経験には報いがあることを子供に教えるべきである。先生はよく準備していなければならない。また　レッスンの目的をどのように認めさせるつもりかをわきまえていなければならない。ヘレン・ケラー女史が最初に「水」の意味を理解できなかったとちょうど同じように，間違って教えるかも知れない。教師は子供たちに最初の形どうりの知識を与えているのだということを忘れてはならない。また教えようとすることの基本的な知識をよくわきまえていて，子供は新しい知識を発見して喜びを感ずるであろうということを悟らなければならない。

「私たちは牛に感謝しています」について今年の夏３才の子供にレッスンをした著者は牛が人間のためになっていることを子供たちに話した。熱心に聞いていた子供はすぐに夢中になって，正しい知識を身につけた。その勉強により新しい知識を得た喜びに勇んでいる子供たちに次は馬について尋ねた。子供たちはすぐに答えたが，不正確なものであった。子供達は馬についてなにも知らなかったが，多くの答えを出した。なぜだろうか。子供達はあくまでも一瞬の刺激を求めているのだ。新しい知識は子供達の周囲に何かよい雰囲気をもたらし，それでその気分にひたっていたかったのである。

どのように先生はお話の効果をあげるか

先生が話をする時には，よい視覚教材を使うべきである（子供たちがよくわかるような写実的な，色彩豊かな，きれいなまた十分な大きさのもの）。先生は子供達にゆっくりと話す。先生は子供の注意がそれていると思う時には，さらにゆっくりと話し，意味深げに子供達を眺める。そして注意をひくために何か驚くようなものを用いる。たとえば，指人形，身ぶりを入れた歌，かくしていて急にあらわれる物とかあやつり人形など動作を用いることによって，子供達を参加させる。先生はアイディアを出す前に子供達に笑いかけて，間をとるのである。

子供達は想像力を働かせる提案には応じるものである。ある子供は理解できないために話の間，他のことを考えているかも知れない。そのような時に，先生は次のように言えるであろう。「健ちゃん，あなたの椅子の下に魔法使いがいると思ってごらん。もしあなたが動くと，みよちゃんの椅子にいる魔法使いがあなたの場所を横取りしてしまうわ。」子供達は「椅子にちゃんと座っていなさい」などという普通の命令にはあまり従わない。はっきりした提案には応えるものである。たとえば「健ちゃんは腕を組んでいますよ。」「マリちゃんは足を静かにしていますね。」「カヨちゃんはニコニコしています。」「ひろし君は先生の方を真直ぐに見ていますよ。」など。すると他の子供達はすぐに模範に従い，話の間秩序が保たれるのである。

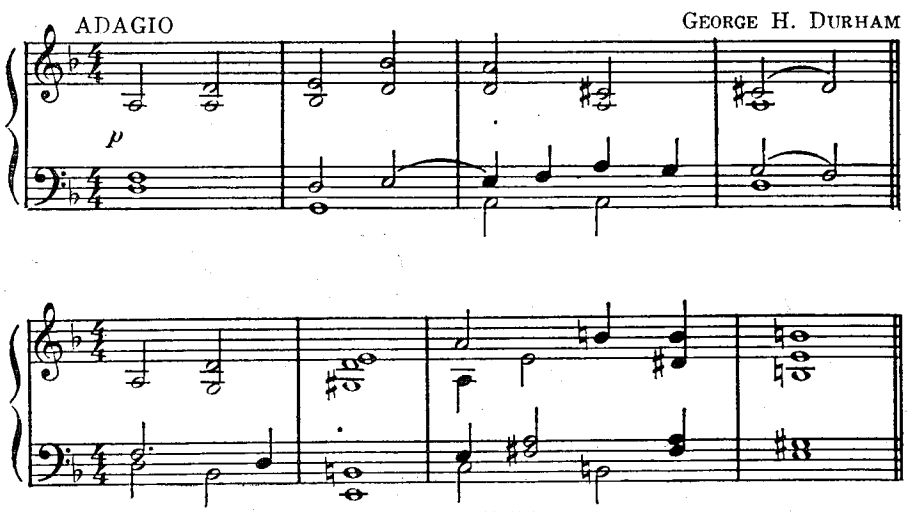
話の後に来るもの

話の後で，その日の内容に関係のある活動をすることが，子供達一人一人に有意義な経験となる。子供達は参加することができれば学ぶのである。

粘土，指で描く絵，粘土をこねる盆，レコードなどといった，子供に話の内容を思い出させるものが役に立つ。

子供達はとても暗示にかかりやすいということを心に留めなさい。子供達は周囲の人々にあらわれるいろいろの特徴をまねるものである。もし先生がしっかりと考え，行動し，良い行ないをほめるならば，その子の日曜学校の最初の経験は楽しいものとなり，さらに同じようなことを期待して，また来たいと思うのである。

今月の前奏曲



1968—69年の聖句

大人日曜学校

9月の聖句
イエスは言われた「心をつくし，精神をつくし，思いをつくして，主なるあなたの神を愛せよ　（マタイ　22：37）

10月の聖句
そこで私ニーファイは，私の父に『私は主が命じたもうたことを行って行う。私は，主が命じたもうことには，人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあり，それでなくては，主は何の命令も人に下したまわないことを承知しているからである』と言った　（Ⅰニーファイ　3：7）

11月の聖句
わたしのいましめは，これである。わたしがあなたがたを愛したように，あなたがたも互に愛し合いなさい。　（ヨハネ　15：12）

12月の聖句
神はそのひとり子を賜わったほどに，この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで，永遠の命を得るためである。　（ヨハネ　3：16）

1月の聖句
見よ，これわが業にしてわが栄光，すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり。　（モーセ　1：39）

2月の聖句
まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば，これらのものは，すべて添えて与えられるであろう。　（マタイ　6：33）

3月の聖句
永遠の命とは，唯一の，まことの神でいますあなたと，また，あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることであります。
（ヨハネ　17：3）

4月の聖句
しかし事実，キリストは眠っている者の初穂として，死人の中からよみがえったのである。　（Ⅰコリント15：20）

5月の聖句
イエスは彼に言われた，「わたしは道であり，真理であり，命である。だれでもわたしによらないでは，父のみもとに行くことはできない。　（ヨハネ14：6）

6月の聖句
また真理を知るであろう。そして真理は，あなたがたに自由を得させるであろう。　（ヨハネ8：32）

7月の聖句
心の清い人たちは，さいわいである，彼らは神を見るであろう。
（マタイ　5：8）

8月の聖句
イエスは答えられた，「よくよくあなたに言っておく。だれでも水と霊とから生れなければ，神の国にはいることはできない。」
（ヨハネ　3：5）

子供日曜学校

9～10月の聖句
なぜならば，よいものはみな神から出るからである。
（アルマ　5：40）

11—12月の聖句
わたしたちは互に愛し合おうではないか。愛は神から出たものなのである。　（Ⅰヨハネ　4：7）

1～2月の聖句
自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ。
（マタイ　22：39）

3～4月の聖句
イエスは言われた「もしあなたが私を愛するならば，わたしのいましめを守るべきである。」　（ヨハネ　14：15）

5～6月の聖句
神は自分のかたちに人を創造された。　（創世記　1：27）

7～8月の聖句
わたくしは主が命じたもうたことを行って行う。
（Ⅰニーファイ　3：7）

12月の聖句

大人日曜学校

神はそのひとり子を賜わったほどに，この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで，永遠の命を得るためである。（ヨハネ 3：16）

子供日曜学校

わたしたちは互に愛し合おうではないか。愛は神から出たものなのである。
（Ⅰヨハネ　4：7）

イエスの教えが今日にもあてはまることを若い人たちはどう説明できるでしょうか
若い人たちは次の二つを共に得られるでしょうか

福音の標準と人望

七十人最高評議員　ポール H. ダン長老

ある時のこと，娘が私のところへ対人関係についてのむずかしい問題を相談しにきました。娘はその時高校生で，七人の少女で作っているグループに入っていました。（そのうちの四人が教会員でした）その四人は暗黙のうちに他の三人を改宗させるという協定を結んでいるかのようでした。ある日いっしょに昼食をとっている時，時々あることでしたが，末日聖徒の少女がつまらない話を始めました。その話は実際にくだらないものでした。

好かれる人に

娘は家へ帰ってからその時のことを話してくれました。実際がまんできなかったのです。「お父さん，何が良くて何が悪いかなどと言わないで。福音がそのことをしてはいけないと教えていることはよくわかっています。でも，お父さんだったらこんな時にどうしますか？　どうしたらいいの？」

娘はこれ以上言いませんでしたが，その目にこの言葉を読むことができました。「お父さん，私の年令では仲間に加わりたいのです。15歳の子はみんな人気者になりたいと思うわ。みんなに仲間はずれにされないでみんなからいらっしゃいって言われたいわ。みんなはあまり教会的なことはいやなんです」。娘は，「答えを教えて下さい。みんなに好かれる人にもなれる答えを教えて……」と言いました。それは教師や両親みんなの仕事です。

私たちはしばらく話しあいました。私はよく娘たちに，自分の生活に福音の原則をとり入れるようにと教えます。少し

「私たちは友だちと仲よくしながら教会の標準を守ることができるでしょか。

話しあった後で，マタイ，マルコ，ルカ伝に記された宮清めのことに触れました。パリサイ人とサドカイ人，両替人の行ないが思い出されることでしょう。それを読んで娘に，「この話から何がわかるだろうか」と聞きました。娘は，「救い主はふつうと違っていらしたわ」と答えたのです。

断固として立ちなさい

私はこう言いました。「一つヒントを話していいかな。救い主は，すべての人に断固として立ちあがらねばならない時のあることを言われたのだ。そのようなことはごく少ないかもしれないがたとえ容易でなくとも正しいことを為さなくてはいけない時がある。時にはたった一人でも断固として立ちあがらねばならないことがあるのだよ。このことについて考えてごらん。そのあとでまた話そう」

娘はそれについて考え，少ししてから戻ってきました。「お父さん，その教えを私にどうとり入れたら良いのか，まだわからないわ」そう言って少し話をしました。

私は言いました。「救い主が正しいことをされたのなら，さあ，ガレージに行って，ムチを作ってあげよう。おまえは明日学校へ行って正しくないことをはらい清めたらどうかね」

「お父さん，肝心なことを教えて下さらないわ，そんなことできないし，みんなに嫌われてしまうわ」

「そうかい。ではこれはどうだろう。今度また，あんなことがあって誰れかがくだらない話を始めたら，立ちあがって言うのだよ。ここで聞いているみなさん，もうこんな話はやめますってね」

「お父さん，わかっていないのね，そんなことできやしないわ」

私は娘がそう考えるだろうと思っていたので，「では，どうして自分はこうしたいと言わないのだい」と聞きました。

娘は，「もっと考えます」と答えました。

役に立つ新約聖書

私が仕事に行き，翌々日に家へ帰った時，妻は台所でじゃがいもの皮をむきながら涙を浮かべていたのです。私は，「どうしたのか」と聞きました。

「娘のことです。行ってみた方がいいですわ。」

また別のことが起きたのだと思って，そっと部屋へ行ってみると，重大な問題で人生ととりくんでいる彼女は涙をふいていました。

「どうしたのか話してくれないかい。」

「お父さん，大事なことなの。私，今日宮清めの話を実行したのよ。」

「ええ，学校をムチで清めたのかい。」

すると娘は答えました。私，Mさん（良くない話をした末日聖徒の少女）に，私の家へ来ないって言ったの。Mさんはいいと言って，いっしょに帰ってきました。部屋に入ってからMさんに言ったんです。「私にとってあなたとの友情は本当に大切なの。きのうあなたはみんなの気持を悪くしたわ。私はそう感じたし，きっとあなたもそうだと思うの。あなたがそんなつもりでないことはよく知ってるけれど，あの話をした時に，教会員でない人たちの目には私たちが低く写ったでしょう。あなたがあの話をした訳はちゃんとあって，良い方法に思えたからそうしたということはわかるけれど，今度そうしたいと思う時には，私が弁解できるように前もって教えてね」って。

Mさんは泣きくずれ，私の手を握って，「ごめんなさい」と言ったの。そして私たち三十分も泣いていたんです。

そして娘はこう言いました。

「お父さん，どうしてかわかる？」

「いいや，わからない」

「新約聖書って本当に役に立つのね」

私の壁にかこまれて

ガリー R. ハッチ

私は大そう年をとっていました，私の壁板は薄く，板のすき間から昼は陽の光がもれ，夜は冷たい風がふき込みました。陽の光は，厚い皮ひもでおさえたがっちりしたドアからも射しました。

私は堂々とした宿屋の裏手に立っていました。でも私は楽しいのでした。私には貫録がないのでいつもまごついていました。もっと小さな目的のために私は作られたのです。なぜなら私は馬小屋でしたから。

徴税の時期がやってきて立派な宿屋は人でいっぱいになりました。でも私は数頭の牛を泊めるだけでした。

今朝早く，主人がやってきて私の床を掃除してわらを変えてくれました。いつも家畜たちが私を手荒く扱うのに慣れていたのに，驚いたことには，その日来た家畜はたいそうおとなしいのでした。片すみに立って，みんないっしょに少しのわらを食べていました。一日の終る頃にも，馬小屋はまだきれいでした。私はきれいだったのです。

突然私のドアがきーきーとあいて，私のきらいな夜の空気が入ってきました。そこには主人と，背の高いやさしそうな男の人が立っていました。

「これはいいですね。私は急いでいるのです」男の人がそう言い，主人はおやすみなさいと言って立ち去りました。見知らぬ男の人は，女の人をのせたロバを連れていました。男の人は女の人をやさしくおろして，わらをきれいに整えました。美しい女の人でしたがとても疲れているようでした。

その夜，女の人は赤ちゃんを生みました。**私の壁にかこまれて**，その人は神さまの御子を生んだのです。

他のよりずっと明るい星が私を照らし，私の壁にかこまれて，素晴らしい光景がありました。

私はちっぽけな馬小屋でも，作られた役目をこの上なく立派に成し遂げたのです。

私の魂よ、喜べ

トルディ・リッチー

「いらっしゃるぞ，おれたちの村へおいでだぞ」人々が叫びました。

「どうして？」私が聞いても何も返事がありません。でもとにかくいらっしゃると知った私は，赤ん坊の泣き声のするところへ行ってお母さんに聞きました。「いつ，いらっしゃるの？」「さあ，わからないわ。今にでも……」こう答えてその人はそそくさと立ち去りました。私は匂いにひかれて食事を用意している人のところへ行きました。「どの道からいらっしゃるの？」「町からだ。おそらくは……」「そうだ，きっと町からだ」

町への道を行けば，村人の誰れよりも先にお会いできる。村人たちのごったがえす中はきらいだし，まい子にもならない。お母さんは売りに行く水差しとつぼを作ったから，それに飾りをつけているに違いない。私はつぼに飾りがつけられないから，家にいなくても大丈夫。私は一度でいいから，兄弟たちがしたことのないことをしてみたいと思いました。その道を歩いて行って，村へいらっしゃる人にあって，お話をし，いっしょに家まで帰ってこよう。私はそう思って出かけました。

まもなく友だちの追いかけてくる声が聞こえました。私をさがして家へ連れ帰ろうとしています。私が出かける時はいつも誰れかがついてくるのはどうして？　やがてその声は私を追いかけているのでなかったことがわかりました。その人たちは小さな道のところで走るのをやめて大声でおしゃべりをしていました。あの人がいらっしゃったのです。がやがやという声の中にも，静かでやさしいその人の声は暑い夏の空気を通して私によく聞こえました。その声のする方へ耳を傾けて人ごみの方へ向かいました。その人が私を見て下さったらと思いました。でも私にはその人が近くにおられることがわかりました。なぜなら，大勢の人ごみの中でもその人のまわりにあるという平安を感じたからです。

まったく突然に，私の肩に力強い手がおかれたのを感じました。そして声がしました。「主よ，これが私の村の盲目の娘です」

他の人たちは叫んだり話しあったりしていました。けれどそれは私の耳に入りませんでした。太陽が花に照りつけ，私の背中を焼いても，そんなことは気になりませんでした。さわやかな手が私の目に置かれたのです。そして，その時，私は生涯で初めて光と暗さとその間のかげを知りました。啓示のようにやってきた色彩は，数えきれない形やありさまを教えてくれました。私は，深い心のこもったまなざしで，まっすぐに見つめられないほどに愛をたたえたお方を見ることができたのです。私は見ることができたのです。

ＭＩＡによる個人の進歩

マクシン T. ショップ

聖典を調べると，個人個人の人を強調している箇所を多く見つけることができる。主は使徒を一人一人お選びになった。群衆にお話になった一方で，ラザロを墓から起こし，マリアやマルタと語り，婦人を苦しみから解放したもうた。主は言われた。「見よ，これわが業にしてわが栄光，すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり……」この御言葉は，主が一人一人に不死不滅と永遠の生命を受けることを望んでおられることを表わしている。

ＭＩＡの役員は，若人の一人一人と共に努め励む責任を与えられている。各々は，みな主から見て大切な人であるのと全く同様に，役員にとっても大切な人々である。

ＭＩＡのプログラムはグループを対象として計画され，大勢の人々が参加して行なわれるが，実際には個人個人に関係しているのである。教師は一人一人を導いてグループ活動に活発に参加できるようにと教える。必要な時に暖かい友情の手を感じることは善を求めて生きようという励ましになる。

クラスの人の名前を覚えることは，教師の第一の責任である。このことは，生徒が群衆の一人でなくなるための最初の段階である。そこから始まって，各生徒の個性を見出し，彼らの前にひらけている将来の可能性を充分に達成できるよう

助けることができる。

卒業式や教会の集会に集うさまざまの人を見ると，顔が一人一人違うように，感情，才能，好き嫌いなどが実にさまざまであることがわかる。毎日の生活においても困難にぶつかった時でも，一人一人の心に触れるということ，これがＭＩＡの果すべき目標である。

ＭＩＡの役員たちは，青年男女の一人一人と共に働く責任を与えられている。この一人一人が主の目から見て大切であると同じように役員たちにも大切な人なのである。

特別にめだたない少女の例がある。彼女は気転もきかずどもりであったが，ＭＩＡ活動のある時はいつも進んで参加していた。クラス教師や活動の教師は彼女の「行なおう」という望みにうたれて，いつも彼女のために心して機会を与えていた。ロードショウに出演し，四重唱を歌い，話をした彼女は，ビーハイブ，マイアメイド，ローレル，グリーナーなどのクラス賞を受けた。彼女は信頼される人となり，証詞は強くなった。内面から輝き出す美しさは，いわゆる美しくはない外面を越えて輝いた。人々はみな彼女を愛した。しかし，それは一夜にして起こったことではない。ＭＩＡの活動に何年も参加して，常に少しずつ進歩してきた成果である。聖餐会やＭＩＡや日曜学校に，たとえ旅行の最中でも出席しようと努める娘を見たご両親は，このＭＩＡ活動を新らためて認識された。そして家族みんなでＭＩＡに集っておられる。家族の人たちは，ＭＩＡプログラムによって進歩することがどういうことなのかを，彼女を通して知った。

その少女は二十代になって間もなく帰還宣教師と結婚して町から移って行った。それから七年経って，今からほんの数週間前，このご夫婦は子供を四人連れてこの町を訪れた。彼女はやさしくしあわせそうできちんとしていた。多くの人々は成功をつかんだ彼女を半ばうらやみの心をもってみつめた。この素晴らしい家族が町をゆく時，人々の目は彼らを追い，福音とＭＩＡが彼らにもたらした大きな恵みについて語りあった。

ＭＩＡは，進歩して成功するＭＩＡの少女たちを求め，見い出し，彼女たちを誇りとする。あらゆるところにいるさまざまな個性と能力を持ったあらゆる少年少女を捜して，愛と機会を与えるというＭＩＡの責任は明らかであって，いつまでも止むことなく続けられるのである。

伝道部長メッセージ

日本伝道部長　ウオルター　R. ビルス

愛する兄弟姉妹の皆さん

再び，あなた方と共に恵まれて，このクリスマスをむかえる事は非常な喜びです。

一年の間でも，なんと豊かな充実した時期でしょう。主のために，我々は何が出来るか…私はこう尋ねたいと思います。

昔，あるにぎやかな夜に，やがて世界の運命を変えるべき一人のみどり児が，粗末なかいば桶の中で生まれました。この幼児は，まわりにいる，あなたや私の幼ない息子達と何の変わりもない様でしたが，世の罪をその身にうけるべき子供でした。彼は，誰にでも与えられていた遂行すべき偉大な使命をたずさえて来ました。このガリラヤの人は，どういう人なのでしょうか？この方は，ふつうの健康的で，幸福な若者の様に成長しました。ほんの短かい間でしたが，この世での父母と共に暮らしました。お父さんの大工仕事を手伝いました。力強く，愛に満ち，彼の身近かにいた人々を愛し，祝宴や結婚式などにも出席しました。以上の様なこの世での特質を考えに入れなくても，主は善悪をわきまえて，太初から世界中の兄弟姉妹達に伝えるべき使命と，天父が，何をし何を述べるために，この世につかわしたかを知っておられました。

イエスは言われた「わたしは柔和で心のへりくだった者であるから，わたしのくびきを負うて，わたしに学びなさい，そうすれば，あなた方の魂に休みが与えられるであろう」

（マタイ　11：29）

イエスに従う者にはどんなくびきがかけられたのでしょうか。それは「我が名と，我が権能をもって行け，そうすれば我がみたまは汝と共にあらん」という事を意味していたのです。そしてその様になり，人々は，聖典に述べられている「わたしのくびきを負え」の如く，信仰，教義，及び原則の点で一体となったのです。特に，このクリスマスに，その教えを味わいましょう。救い主がお与えになる以上に，すばらしい恵みがあり得るでしょうか？

「こころの貧しい人たちは，さいわいである。天国は彼らのものである：悲しんでいる人たちは，さいわいである。彼らは慰められるであろう：柔和な人たちは，さいわいである。彼らは地を受けつぐであろう：義に飢えかわいている人たちはさいわいである。彼らは飽き足りるようになるであろう：あわれみ深い人たちはさいわいである。彼らはあわれみを受けるであろう：心の清い人たちは，さいわいである。彼らは神を見るであろう：平和をつくり出す人たちは，さいわいである。彼らは神の子と呼ばれるであろう：義のために迫害されてきた人たちは，さいわいである。天国は彼らのものである。わたしの為に，人々があなたがたをののしり，また迫害し，あなたがたに対して偽って様々の悪口を言う時には，あなたがたは，さいわいである。喜び，よろこべ，天においてあなたがたの受ける報いは大きい……あなたがたは，地の塩である」　（マタイ５：３～13）

兄弟姉妹の皆さん，正に，クリスチャンの世界にあっては人に与えたり，人から受けたりする季節です。クリスマスに興味を持つのは，多くは習慣からです。私達の同胞を助けられる多くの事があります。与える側の人として，物のない人貧しい人をさがし出して，あなたの持っている物を，分け与えましょう。独りぼっちの人に，訪問するだけでもよいから喜びを与えて下さい。そして，よろこびの気持と，彼らへの感謝の気持ちを分け与え，身近かで不幸な人をさがし，その人々の不幸を軽くしてあげて下さい。そうすれば，あなた方に大きな喜びが，返ってくる事でしょう。

共に分かちあい，幸福になり，自分自身及び，その才能を捧げる季節です。

まわりの人々を思いやり，私達が理解している福音と，人生の計画，そしてクリスマスを祝う意義を分かち与える季節です。今は，主の恵みを受ける季節です。そしてあなた方も……あなたの人生を，私達のあがめている主にならって下さい。主はその生涯において，単なる伝説の中の人物や，象徴ではなかったのです。主は私達が天父のもとに帰って，そこで天父と，一緒に住む事が出来る様に，その生涯を送られたのです。私達は**主が生き給い**私達すべてを愛してくださる事を知っています。そして主は，天父の前に再び帰れる様に，私達を教えに従わせるのです。

ビルス姉妹と私の家族より，クリスマスに際しての，心からのごあいさつを申しあげ，恵まれて，あなた方と共にこの日本にいますことを天の父に感謝しています。

伝道部長メッセージ

日本沖縄伝道部長
エドワード　ユキヲ　岡崎

全世界のクリスチャンにとって，クリスマスは，世につかわされた偉大なおくりものを記念する喜ばしい季節であります。そのおくりものとは，みなさまも知っておられるようにイエス・キリストの誕生とその生涯であります。イエス・キリストの教えによって，私たちはより良く，より幸福な生活をすることができます。私たちは，ならうべき模範，すなわち愛と慈悲と奉仕の生活を示すキリストの教えをいただいているからであります。

クリスマスの季節に，贈物を交換して，感謝をあらわし，キリストの模範にもっと近づこうという心を新らたにすることは，世界中で広く行なわれていることであります。贈る人々はそれに心を託し，受ける人々は贈物に愛を感じとります。受けることより与えることの方がより大きな祝福であると言われたキリストの教えは，クリスマスの季節に贈物をすることの中によくあらわれています。

さまざまな贈物が店で売られています。世界中の老若男女が高価なものや安いものを店で買っています。しかし，全人類にとって最大の贈物は，イエス・キリストの福音と，この最後の神権時代に地上に回復された主の真の教会であることをみなさまに証詞いたします。この日本沖縄伝道部には，毎日何百という人々にこの最も大いなる贈物を分かち与えようと証詞を述べる宣教師が，120名おります。彼らはこの最も貴い贈物，人類の受ける最大の贈物を分かち与えようと働いておりますが，それを受け入れる人々はほんのわずかです。ですから，福音を受け入れてこの贈物をいただいた私たちは，他の人々にまして豊かな祝福を恵まれているのです。私たちは主の教えにあずかるという恵みと喜びを得ております。

このせわしくはあっても，しあわせなクリスマスの時に，地上における主の真の教会の会員である私たち末日聖徒がこのように生きようとさらに決意できますように，心から祈ります。

1　愛と慈悲と奉仕の御方であるキリストの生涯にならって生きることができるように，日々この贈物を使って生活する。

2　この世の生活を終えた時に天父に再会できる者となるように，日々福音にそって進歩する。

3　両親，親族，友人，隣人を支部長に紹介することによって，素晴らしいこの贈物を無償で分け与えようと努める。

エマーソンは言っています。「指輪や宝石は贈物ではない。贈物の申しわけに過ぎぬ。真の贈物はただ，そこにそそがれるあなた自身である」これは真実ではありませんか。主はイエス・キリストを地上に送られて，御自身をそそぎたもうたのです。地上で導きと恵みを施している間，救い主は神の豊かな御力を，神のすべてを私たちにそそいでくださいました。ジョセフ・スミスと，現在の予言者デビド O. マッケイ大管長をも含むすべての予言者も，そうであります。またこのことは，召しに応え，喜んで能力と心と力のすべてを尽して主に仕える末日聖徒にも言えることなのです。

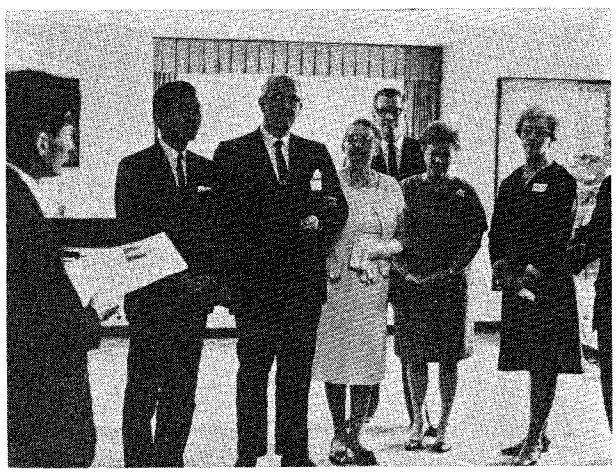
妻と二人の息子と共に私達は，愛の心を寄せて下さる日本の聖徒，宣教師，国民のみなさまに，真心からの感謝を申しあげたいと思います。私たち一人一人を心から愛してくださる天父のましますこと，イエス・キリストがまさしく私たち一人一人のために地上につかわされた神の御子であられること，主が確かに末の世に予言者たちを送りたもうていること，私たちは，主の御手のうちにあって愛する日本の人々に最も偉大なこの贈物を分かち与えるようにと用いられる主の道具であること，固くゆるぎないこれらの証詞は，この贈物を受けた故に与えられる証詞であります。この証詞こそ，クリスマスの季節にあなた方一人一人に贈る私共のプレゼントであります。

この最もしあわせな季節に主があなたを祝福したもうて，キリストの業に似た愛と慈悲と奉仕の業に献身しようとの決意を新らたにできますように。感謝をこめて……。

ベンソン長老を迎えてレセプション開く

11月12日夜，十二使徒ベンソン長老ご夫妻が来日された。翌13日は農務長官時代交流のあった方々をはじめ政財界の著名人，報道関係者を招待し，日本伝道本部でレセプションを開いた。席上ベンソン長老は教会の紹介，万国博の展示計画などを説明し，末日聖徒イエス・キリスト教会への認識を深めていただくようお話された。

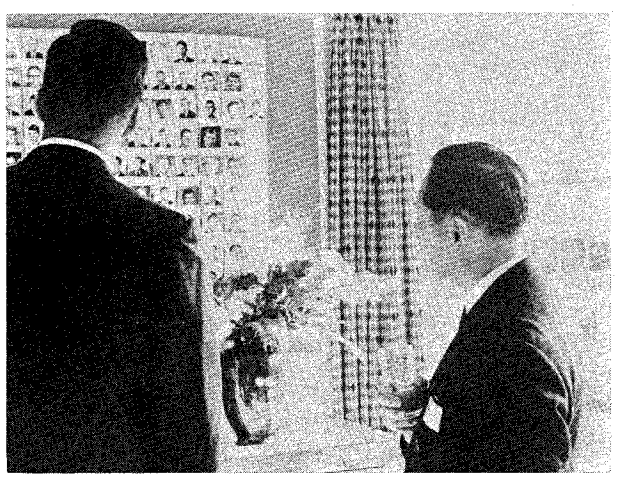
羽田空港



レセプションでの教会紹介

説明をきく出席者

国会議員千葉三郎氏



宣教師制度の説明

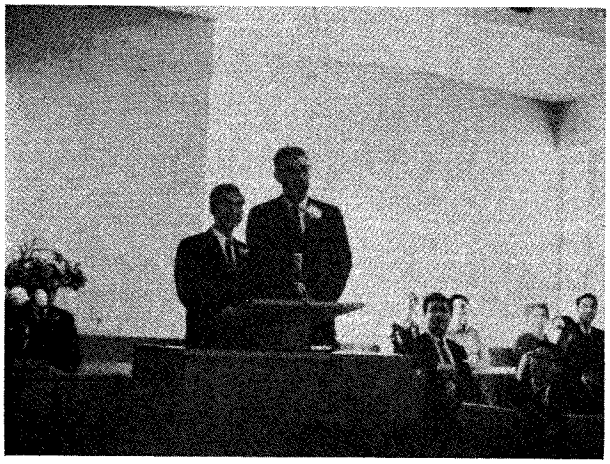
マッコンキー長老ご夫妻来日

ベンソン長老と共に新しく極東地区担当教会幹部に任命された，ブルース R. マッコンキー長老ご夫妻が，11月9日夕，羽田空港に到着された。はじめて日本を訪問されたお二人は，ビルス伝道部長をはじめ，たくさんの会員から暖かい歓迎を受けた。

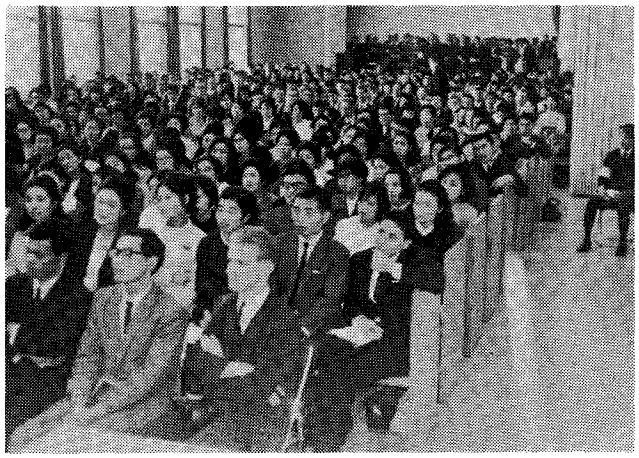
翌10日の安息日は，東京西支部で特別大会を開き，神権指導者会，神権会，一般大会で数多くの話をされた。モルモンの教義その他いくつかの著者として知られるマッコンキー長老は，とくに深い教義に基づくお話をされ集つた兄弟姉妹に強い感銘を与えられた。

羽田到着のご夫妻

神権者に話されるマッコンキー長老



一般大会にて



大会で聞き入る聖徒たち

支部だより

ご結婚おめでとう！

実りの秋を迎えると各地より支部だより編集係へ，たくさんの結婚写真がとどきました。今月は特集として11月20日までにいただいたモルモン・カップルをご紹介いたします。この一年間，支部だよりを投稿して下さった皆さんに感謝いたします。

紙面の都合で，一部掲載できなかったことをお詫びします。69年度も，楽しいページとなりますよう，支部だよりをおよせ下さい。

（敬称略）

札幌支部
十月十二日
神野房公
安達敏子

旭川支部
九月十二日
山田次美
浜口和子

東京南支部
十月十日
寺坂昇
佐藤寛子

福岡支部
九月二十一日
石川修
小越町子

旭川支部
九月七日
松倉信次
田中静穂

東京北支部
十月十日
磯部松久
湯美枝子

神戸支部
十月十日
水野敬一
白石美津子

新潟支部
十一月十一日
錦沢三千男
沢口ヤス

東京北支部
十月二十六日
八木沼修一
村上千尋

横浜支部
十月十日
野間龍一
塚田恵子

聖徒の道
昭和四十二年十二月十八日第三種郵便物認可
一九六八年十二月二十日発行（毎月一回二十日発行）第十二巻第十二号

スポークン　ワード

リチャード L. エバンズ

一つの心，一つの生き方

「人は何者なので、これをみ心にとめられるのですか」[1]詩篇に記されるこの問いは、深い探究の心を映している。美術、音楽、文学、科学、人の行なってきたこと、造り出してきたことは語り尽くせぬほどに数多い。それらを見る時に、人の心と霊と英知の無限なことは明らかである。成長する力、考え、感じる力—肉体や精神の働きと作用と組成。肉体と心と霊をいただく人間は、万物にまさって実に驚くべき機構をもった被造物である。「うちに智恵をおいたのはだれか」[2]主はヨブに尋ねたもうた。「心に悟りを与えたのはだれか」[2]。身体に癒える力を与えたのは誰れか。知り、学び、判断し、決定して、昔を覚え、将来を計画する人の力を思う時、畏敬の念が胸に満ちる。人間に、そしてさらに造り主と、その与えたもうたすべてのものに……。我々はこの事実に目覚める。この身体、この心はこの世の生涯を保つものである。分別のある人は、高価な機械を故意に乱用はしない。しかし、身体の働きを損い害を与えてそれを乱用することは、はるかに無分別なことである。身体を傷つけ、心を痛めて暗くし、良心と心の平安を乱しながら、自らと隣人を害する行ないにも感じなくなることは、何と不敬なことであろうか。一人の人に一つの心，一つの生き方—それが人の持つすべてである。死ぬべき世はすみやかに過ぎゆき、永世は永遠に長い。生命、心、記憶、才能、目的、限りない可能性、驚くべき働きをこの身にいただく人間の誰れが、狭い視野でまったく感謝を忘れて自らを破壊できようか。神の造りたもうた自然の法則——健康と幸福の法則——地の法則、平和と善をもたらすというその法則の目的にかなった潔さと、清い思いと、明らかな良心と健康をふみにじる行ないは誰れに許されようか。法則なしに生命はあり得ない。

注1 詩　8：4
　2 ヨブ 38：36

ＦＥＮ放送で毎日曜日８：05～８：30 a.m まで、スポークン・ワードとタバナクルコーラスが放送されています。

聖徒の道
1968年12月20日発行
振替口座　東京１６２２６番
発行人兼編集人　ウォルターＲ．ビルス
発行所　東京都港区南麻布５－８－10
　　末日聖徒イエス・キリスト教会　電話（442）7438
印刷所　太陽印刷工業株式会社
定　価　１００円
予　約　一年間 1,000円（外国4ドル50セント）
電報受信略号　「トウキョウ」マツジツ